

『イエムじゃない』

—— 香港で働くインドネシア人家事労働者の「つながりの平等」による主体性 ——

澤 井 志 保 *

Bukan Yem:
Subjectivity of Indonesian Domestic Workers in Hong Kong
Based on “Connection-Based Equality of Care”

SAWAI Shiho*

Abstract

In Indonesian literature, “*baboe/babu* (female maid/domestic worker)” appears recurrently as a prominent icon of lower-class women’s submission and subordination. For instance, *babu* oftentimes symbolizes a victim, a vamp, or a bimbo in the text, in the authors’ attempt to question the negative impacts of modernization processes in society. As a result, *babu* cements the derogatory images of women’s intimate labor at the intersection of gender and class, as the figure in the lowliest position amongst *nyai* (concubine) and *bini* (wife).

This links to the fact that the devaluation of female domestic work has occurred in tandem with the gendered division of the public and private spheres. Such gendered division assumes males as “independent” subjects and females as symbols of dependency. With intimate labor (including domestic labor) being defined as women’s work, women’s own need to be cared for has been stripped from “public” discourse. In this way, the welfare of domestic workers is oftentimes overlooked behind their care responsibilities.

However, the rising tide of transnational migration of Indonesian women as domestic workers has been redefining the meaning of intimate labor. This paper examines an award-winning short story written by an Indonesian woman who used to work as a domestic worker in Hong Kong and Singapore, to indicate how her text resists the conventional image of *babu* to inaugurate a brand-new subjectivity of female domestic worker, based on Eva Kittay’s notion of “connection-based equality of care.” For this purpose, I elucidate that this text underscores caretakers’ right to equality in carrying out their duties without giving up their own safety and welfare, something that is embedded within the relationship between two Indonesian domestic worker protagonists.

First, I examine the fetish of *babu* as presented in existing prominent literary works. Second, I explore the story in question to point out how it deliberately employs an outrageous domestic worker protagonist in a way that apparently deviates from the aforementioned stereotypes of the domestic worker. By doing so, I argue that this deviant protagonist effectually defamiliarizes the conventional image of a female domestic worker in a Freudian sense of *unheimlich*, to unveil the people’s prejudice crystalized behind it. Third, I indicate how the two protagonists exchange mutual care and attention, although they do not give up their own dignity and reasons. Such portrayals remind us of the “care inequality” of caretakers, which in turn suggests their vulnerability in receiving their fair share of care in the name of work responsibilities. From these points, I conclude that the text successfully unsettles and contests the fetish of domestic workers as care servitude, thus radically questioning how to build up better definitions of equality, autonomy, and dependency in caring for others, by revisiting them from the viewpoints of the time of globalizing intimate-labor migration.

Keywords: Indonesian literature, transnational migrant domestic workers, *babu*, subjectivity, intimate labor, connection-based equality of care

キーワード：インドネシア語文学，国際移住家事労働者，バブ，主体性，親密性労働，つながりの平等

* 天理大学国際学部；Faculty of International Studies, Tenri University, 1050 Somanouchi, Tenri, Nara 632-8510, Japan
e-mail: sawais@tenri-u.ac.jp

はじめに

2014年1月10日、香港で働くインドネシア人家事労働者¹⁾向けのタブロイド紙の記者により、フェイスブックにて一枚の衝撃的な写真がシェアされた。それは、空港の待合室によくあるようなベンチにひとりたたずむインドネシア人女性の写真で、やせ衰え、顔と手指全体はひどい皮膚病のような斑点におおわれていた。彼女は傷だらけで、ふつうは人前に入るのに違和感を感じるような、サイズの大きすぎる黄色いスエットの上着を身につけ、感情の全く見えない、からっぽのような眼差しでカメラを見つめていた。写真の下にはコメントがあり、香港で働くインドネシア人家事労働者組織のメンバーが、この異様ないでたちの女性を香港国際空港で偶然見かけた際にこの写真を撮影したこと、この女性が、香港で家事労働者として働いていたが、雇用者に虐待を受け、帰国するのだと語ったことが書かれていた。写真撮影者はこの女性に詳しい話を聞こうとしたがかなわなかったため、写真に写った女性を知るものがいたら情報提供を呼びかけているということであった。

これが、その後ひと月の間に、外国人女性家事労働者に対する虐待事件として国際的に報道され、²⁾ 香港で働くインドネシア人家事労働者とその他の多くの支援者による抗議行動を引き起こし、³⁾ 社会問題として大きく取り上げられることとなる、⁴⁾ エルウィアナ事件⁵⁾の発端であ

- 1) 2014年1月時点で、香港は約32万3千人の外国人家事労働者を受け入れており、そのうち51.4%がフィリピン国籍、46.3%を占めているのがインドネシア人である [Hong Kong, Legislative Council of the Hong Kong Special Administrative Region, the People's Republic of China 2014]。とくにインドネシア人女性家事労働者の海外への送り出しは、2000年代から急激に増加した結果、香港においても、それまで最多数派であったフィリピン人家事労働者の数には迫いつくまでとなった [Ignacio and Mejia 2009: 12; Schaerrer 2012: 188]。
- 2) エルウィアナへの虐待に対する香港での抗議デモについての報道は、インドネシア主要全国紙コンパス 2014年1月19日付ニュース「香港へのインドネシア人移住労働者によるデモ」 [Santoso 2014]、CNN インターナショナルの2014年1月21日付ニュース「インドネシア移住労働者、香港での数千人規模のデモを起こした虐待について語る」 [Shadbolt 2014]などを参照。
- 3) 香港では、香港在留外国人と香港人が一体となって Justice for Erwiana というキャンペーンが行われ、抗議行動や募金活動が行われた [Justice for Erwiana Action Centre n.d.]。アムネスティ・インターナショナルによると、この後、160カ国以上、10万3307人あまりから寄せられた、移住家事労働者の搾取阻止を訴える要請書が香港警察に届けられた [アムネスティ・インターナショナル 2014a]。
- 4) エルウィアナ事件は、インドネシアと香港でのみならず、国際社会にて広い注目を得た。たとえば、TIME 誌の「2014年版もっとも影響力の強い人々トップ100」にて、この年のアイコンの一人として選出されている [Mam 2014]。
- 5) Erwiana Sulistyarningsih (エルウィアナ・スリスティヤニンシ) は、1990年にインドネシア東ジャワ州ンガウィにて生まれた。2013年に家事労働者として香港に移住するが、雇用者にひどい虐待を受け、2014年1月10日に帰国した。彼女への虐待を知ったインドネシア人たちが香港とインドネシアでの抗議キャンペーンを始めたところ、国際的な支持を受けた。エルウィアナの雇用者は、海外逃亡寸前のところを香港警察により逮捕され、懲役6年の判決を受けた [アムネスティ・イン

る。上述のフェイスブック上のメッセージが瞬時に広まったことで、エルウィアナの身元は間もなく明らかになり、インドネシア帰国時には、精神的・肉体的に深刻な状態にあった彼女は、同胞たちの寄付や努力により、インドネシアの病院にて集中的な治療を受けることになった。⁶⁾ この事件が各国のマスメディアで報道された結果、160カ国、10万人以上から外国人家事労働者への虐待に抗議する署名が香港警察本部に寄せられた。この事件は刑事事件として立件され、エルウィアナの雇用者は逮捕されることになった。

エルウィアナ事件は、現在、アジアや中東諸国などの多くの国で働いている国際移住女性家事労働者に対して、凄惨な虐待が起こっていることを示した事件であった。つまりこの事件は、外国人女性家事労働者に対する虐待を許してしまうような価値観がいまだに存在していることを顕在化させたといえる。そして、この種の偏見は外国人として働く家事労働者のみならず、家事労働者一般に対する差別に端を発しているとするならば、このような偏見は、どのようにわたしたちの心の奥底に棲みつくようになったのだろうか。そしてわたしたちは、どのようにこの種の偏見を乗り越えることができるのだろうか。

このような疑問を踏まえて以下では、エルウィアナの出身国であるインドネシアの文学テクストにみられる家事労働者についての言説の系譜をたどり、差別的な家事労働者の主体性が構築されるプロセスとともに、そのような主体性が「つながりの平等」という概念によって革新的に転換される契機を浮かび上がらせる。⁷⁾

具体的には、20世紀後半に出版されたインドネシア語文学作品3作『イネム (Inem)』『下男とバブ (Djongos+Babu)』『パリエムの告白 (Pengakuan Pariyem)』を取り上げて、テ

ターナショナル 2014b; Lau and Chan 2015]。

- 6) この事件は、香港でインドネシア語タブロイド紙を発行するインドネシア人ジャーナリストや編集者が、ソーシャル・ネットワーク・サイト (SNS) でシェアされた情報を通じていち早くエルウィアナの受けた虐待の深刻さを察知し、公私にわたる交友関係を利用してマスメディアに情報提供し、政府諸機関や警察の対応を主導したことで、急速な展開をみた。たとえば彼らは、在香港英語・中国語メディア、インドネシアのマスメディアに情報提供を行うとともに、香港にある外国人家事労働者の自助組織や支援団体とも情報を共有した。その結果、この事件は刑事事件として立件され、エルウィアナの雇用者の逮捕にもつながった (筆者による上記タブロイド紙記者アサ氏への2014年3月25日付個人インタビューより)。たとえば、エルウィアナの写真がフェイスブックに掲載された2014年1月10日からわずかに数日後には、香港とインドネシアのマスメディアがこの事件を報道している。メディア記事については、インドネシア主要全国紙の2014年1月20日付の記事「スラゲン出身のTKW エルウィアナが香港で雇用者に虐待を受ける」[Wismabrata 2014] や、香港大衆紙 蘋果日報の2014年1月14日付の記事「[インドネシア人家事労働者虐待事件] エルウィアナの状況が好転 食事を摂れるようになる」[蘋果日報 2014] などを参照。
- 7) 本稿は、主体性という用語を分析概念として使用している。つまり本稿は、エルウィアナ事件と『イェムじゃない』における発話からどのような主体性 (subjectivity) が読み取れるかという、「解釈」の可能性を検討するのが目的であり、現実の人間主体のみについて論じるものではない。このように、文学や映画などの文化テクストからインドネシア社会事情やインドネシア人の主体性を読み取る研究手法は、アリエル [Heryanto 2014] などを参照のこと。

クスト中で家事労働者と名指された女性たちが、「犠牲者」「誘惑者」そしていわゆる「都合のいい女」として主体化され、こんにちのインドネシアでの家事労働者への差別のプロトタイプを形成してきた系譜について考察する。その上で、香港で家事労働者として働いた経験をもつインドネシア人著者によって執筆された短編小説に描かれるふたりの家事労働者が、互いが埋め込まれた関係性を想像しながら相手を気づかい、安寧を思いやるという「つながりの平等」を発現させる過程を詳細に検討する。これにより本稿は、これらの文学テキストとエルウィアナ事件を交差させながら家事労働者に対する差別的な主体性への呼びかけを批判すると同時に、他者のケアを担う人間が持つべき平等への権利についてのオルタナティブな考え方の可能性を探る。

このような目的のために本稿はまず、バトラーの言う「発話」による主体性概念と、インドネシアにおける家事労働者の呼称「バブ」の意味、そしてキテイが強調する「つながりの平等」という三つの概念を確認する。

I 「発話」による主体性と名づけ

ジュディス・バトラー (Judith Butler) は、人間が発話によって主体的な存在となりえるということを、侮蔑的な名づけを例にとって説明した。

たとえば、ある人間が誰かを中傷的に名指す場合を考えてみよう。もしある人が、「バカ」「貧乏人」「ガイジン」または「オバサン」などの蔑称で誰かを呼びかけた場合、呼びかけられた人は、蔑まれた存在として会話の中で固定されてしまう。発話内容と状況によっては、その名指し自体が、名指される人間の身体的存在を脅かすのと同じような脅威となることもある。つまり、侮蔑的な名づけは、発話と人間の主体化が不可分であることを示している [バトラー 2004: 4]。

しかしバトラーはまた、侮蔑的な発話そのものと、それにより形成される主体の間には、思わぬずれが生じうることをも指摘する [同上書: 18]。たとえば、蔑称で呼びかけられた人間が応答することで、蔑称に新たな意味を付与するというようなケースである。

つまり、発話とは時として、それが語るつもり的事柄以上のものを当初の意図とは違ったふうに語ってしまうものであり、この、名づけの瞬間と解釈が起こる瞬間にみられるような「発話文脈のずれ」こそが、名づける名前と名づけられる身体の間での矛盾を露呈し、普段は所与のものとして受け止められている人間の主体性が、新たな文脈のなかで再構築されるプロセスをわたしたちに確認させてくれるというのだ [同上書: 17]。これは、ある発話が置かれた文脈を読みとる眼差しに、見出される主体性の鍵があるということの意味する。

このような議論をふまえて本稿では、インドネシアにて家事労働者が呼びかけられてきた

「babu (以下, バブ)」という蔑称を取り上げて、この蔑称が発話の時点で予想されていた意味合いを超えて新たな文脈を創造し、家事労働者を再主体化するさまを文学テキストの解釈をもとに明らかにする。

II 「バブ」という名づけとその変遷

インドネシアでは、家事労働者は古くからジェンダーや「人種」、階層などに分岐する偏見に晒されてきた。たとえば植民地時代には、支配者階層である外国人が、いわゆる「原住民」／プリブミの女性を雇って料理や洗濯、掃除などの家事や雑用をさせる習慣があり、このような女性は「バブ」と呼ばれていた [Salim 2013; Setia 2011; ストーラー 2010; 松尾 1997]。⁸⁾ ハイルス [Salim 2013] によれば、1950 年代に出版されたインドネシア語辞書において、バブとは「下女 (hamba perempuan)」と定義されている。

しかしバブは、当時から現地の外国人世帯だけでなく、ジャワ島をはじめとするプリブミの貴族などの特権階層世帯においても、非都市部出身の貧困層女性に低賃金ないし無賃金で家事をさせる際の呼称として使用されていた [Budianta 2005; Locher-Scholten 2000; Weix 2000: 141]。⁹⁾ そして、プリブミ家庭でのバブが現在でいう家事労働者と違うのは、おもに無給¹⁰⁾で雇用家族に奉仕することが少なくなかった点である。¹¹⁾ 特にバブが若年かつ未婚で雇用者宅に住み込む場合、少なくとも表向きは、バブは「diangkat (もらわれ)」, 「ikut keluarga (家族につき従う)」, 擬似家族のようなものとみなされた [Weix 2000: 138]。この場合、バブは雇用者の「家族の一員」であるとみなされる反面、法的な親族ではないという曖昧な立場におかれた [ibid.: 139]。このような立場の曖昧さは、雇用家族とバブの両方が、家族という親密圏の境界をめぐる、家族のヒエラルキーの中で攻防を繰り返すような事態を作り出した。たとえばバブは、家事労働を無報酬でおこなうかわりに、物心両面の面倒を見てもらうことで、文字通り雇用者を「親代わり」とすることで生じる感謝と負い目の気持ちから、雇用家族のさまざまな要請に応えなければならないような状況におかれた。しかし、そのような役割を受け

8) ストーラーは、東インド会社がヨーロッパ人女性の東インドへの移住を制限する一方で、東インドに赴任したヨーロッパ人男性が現地のプリブミ女性と結婚を阻害するような規則を施行していたことが、プリブミの家事労働者の雇用を促進するとともに、ヨーロッパ人男性とプリブミ女性との内縁関係をも増加させたと指摘している [2010: 62]。

9) ロブソンとウィビソノによるジャワ語-英語辞書 [Robson and Wibisono 2002] によると、babu とは female servant to a (foreign) family と定義されている。

10) ここでいう無給とは、現金での賃金支払がないということであり、その代わりに受け入れ家族がバブの生活費や婚費を負担する、またはバブの家族に仕事を紹介するなど、何らかの謝礼はバブにもたらされたと考えられる。

11) ハイルス [Salim 2013] は、スカルノ大統領がインタビューにおいてインドネシアにおける家事労働者とは、賃金労働者ではない点を強調していると述べている。

入れて「擬似家族」として家族に尽くせば、雇用家族から信用を得て、さまざまな便宜を図られる機会にも恵まれる。このような持ちつ持たれつ関係の下、バブが、雇用家族の夫や息子と性的関係を持つこともあった。このことは、バブが雇用者家族の家事労働者、代理母としてだけでなく、代理妻としての役割をも担いながら、雇用者の親密圏に部分的に組み込まれていたことを物語っている。そしてバブは、当時の現地親密圏における植民地主義や封建制度、家父長制文化による権力関係において最下層に位置づけられる存在であった [Salim 2013; Setia 2011]。

このような従属的意味合いのため、独立後のインドネシアにおいて都市部を中心に台頭してきた新中間層が賃金雇用による家事労働者を雇用しはじめた際には、バブではなく *pembantu* (プンバントウ：お手伝い、英語では *helper* に該当) という呼称が使用された。しかし、名前は違えども、元々バブに紐づいていた、貧困、無教養、雇用家族の夫や息子を「誘惑」するような危険なイメージはプンバントウにも引き継がれ、¹²⁾ 当時のジャーナリズムや文学作品、映画などにおいてさまざまな社会的言説を生み出した。¹³⁾ さらに、1980年代よりインドネシア人女性の国際移住家事労働がみられ始めた際には、この種の職業に従事する女性たちは「海外に出稼ぎするバブ」として、TKW (Tenaga Kerja Wanita: 女性労働者) という略称で名づけられ、バブの含み持つステレオタイプと同種の偏見を受けた [Sim 2007: 8]。¹⁴⁾

もともと、1990年代後半以降、海外への女性家事労働者送り出しの拡大を経て、現在のインドネシアでの家事労働者のイメージは、少なくとも表面的には変化を遂げている [Huang *et al.* 2005]。たとえば、現在のインドネシアにおいて、女性が家事労働者として海外に出稼ぎに

12) インドネシア語版ウィキペディアの「家事労働者 (*pekerja rumah tangga*)」の欄にも、この語彙と「お手伝い (*pembantu*)」という語彙がともに、オランダ植民地時代の「女中 (*baboe*)」と同じような差別的な意味合いを帯びていることが言及されている。本稿はウィキペディアの学術的正確性を全面的に信頼するわけではないが、この記述は、現代インドネシア人が家事労働者と聞いてバブを連想することを示す資料のひとつとなろう。

13) たとえば、1976年に公開された人気映画『*Inem Pelayan Seksi* (セクシーな使用人イネム)』の主人公イネムはソロ・マザーの家事労働者で、美人でスタイルもよいため、はからずも雇用者男性とその上司までも虜にしてしまう。プトゥによれば、この映画の脚本家は当初『*Inem Babu Seksi* (セクシーなバブのイネム)』というタイトルを想定していたが、社会的に適正ではないとしてバブという言葉避ける婉曲表現として「使用人」を使ったのではないかと推測している [Setia 2011]。この映画でのイネムは、単純な犠牲者や誘惑者とはまた違った面が強調されている。このように、バブのイメージは本稿で取り上げる以外の文脈も考えられるため、今後さらに詳細な研究が必要であろう。

14) 現在、一般的なインドネシア語会話においては、TKI (Tenaga Kerja Indonesia: インドネシア [人] 労働者) は主に海外で働くインドネシア人男性、TKW (Tenaga Kerja Wanita: 女性労働者) は、主に海外で働くインドネシア人女性家事労働者を指す言葉として使い分けられているが、BNP2TKI (インドネシア労働者海外派遣・保護庁) のウェブサイト (<http://www.bnp2tki.go.id/>) においては、男女ともにTKIという名称が使われているなど、これらの略語の用法にはばらつきがある。

出るのは珍しい光景ではなくなり、これらの家事労働者は、海外での労働中の貯金にて家や車を購入する、または起業するというような、いわゆる「成功者」としても語られ、評価されるようになった。¹⁵⁾ このような状況で、家事労働者についての差別的な呼称も見直されはじめている。たとえば、プンバントゥという呼称にかんしては、言外に女性を意味する点においてジェンダー的偏見を内包しており、なおかつ「お手伝い」という名のもとに、家事労働者の労働者としての地位を看過していることが問題視され、家事労働者の権利保護にかかわる省庁や NGO による公式文書などを中心に、PRT (Pekerja Rumah Tangga: 家事労働者) という名称が使用されている [Kementrian Hukum dan Hak Asasi Manusia 2014]。また、国際移住女性家事労働者を指す TKW という名称に関しても、NGO による刊行物などが、女性労働者イコール家事労働者と言外に仄めかす語義は「家事は女性の仕事」という偏見とともに、女性が賃金労働を行うこと自体を蔑視するような姿勢にもつながりかねないとして、BMI (Buruh Migran Indonesia: インドネシア移住労働者) として「呼びなおす」動きがある (たとえば *Jurnal Perempuan* 第 56 号を参照)。これらは、あらかじめジェンダー化された存在であったプンバントゥや TKW を、労働者そしてインドネシア国民としての尊厳とともに主体化しなおそうとする動きの一端と考えられる。こうしてバブという語彙は、公式な言説からはほぼ姿を消している。

さらに、2000 年代後半においては、国際移住するインドネシア人女性家事労働者たち自身が労働者としての権利の向上を求めて、香港をはじめとする移住先の地域において労働運動や自己啓発活動に活発に参加する現象もみられている [Constable 2009; Chang and Ling 2011; Hsia 2009; Lai 2010; Sim 2010]。¹⁶⁾ このような社会運動の盛り上がりは、家事労働者が、「バブ」

15) 2014 年 7 月 21 日付のインドネシア・Bisnis Indonesia 紙によると、香港を含む海外への移住労働者たちがインドネシアに送金する 1 日あたりの総額は 50 億ルピアにのぼると述べている [Sofi'i 2014]。これらの送金を元手に彼らが自宅を改修したり、ビジネスを始めたりする様子はマスメディアや個人ブログ、SNS などでも頻繁に言及されているため、海外への移住労働者たちを「カネ持ち」とみなす風潮がある。たとえば、インドネシア主要全国紙コンパスに掲載されたコラム「金持ちになりたかったら TKW になろう！」[Utami 2015] などを参照。

16) 海外で働くインドネシア人家事労働者の権利保護についての自己啓発運動は今後、インドネシア国内で働く家事労働者の権利保護運動にもつながる可能性を秘めている。なぜなら、ある程度 (たとえば高校卒業程度) の教育水準やスキルを保持していることが職を得る条件になる場合もある国際移住家事労働者は、インドネシア国内でいう最貧困層出身ではないことのほうが多い。一方、インドネシア国内で働く家事労働者は概ね、海外移住するものよりも低賃金でより困難な就業環境のもとで働いているものが多いため、国際移住家事労働者にもまして、権利保護や啓発を必要としていると考えられるからである。しかしながら現在のインドネシアにて国際移住家事労働者と国内の家事労働者の間に見られる階層的分断を乗り越えようという動きは未だ端緒にいたばかりであると見られる。したがって、本稿の射程からは外れるが、インドネシア人の国際移住家事労働者による社会運動が、国内で働く家事労働者が抱える問題とのつながりを見出し、協働の道を模索することで、親密性労働にまつわるジェンダーと階層に分岐する複合差別を変えていく道筋がさらに広がる可能性を指摘しておきたい。

に紐づくような主体性を、みずから「社会運動参加者」として読み替えるという「主体性の政治」を行っているとも考えられるだろう。しかしこれはまた、上述のエルウィアナ事件に代表されるように、現在まで彼女らが雇用者に暴力や差別をうけるなどの脆弱性にさらされている¹⁷⁾からこそ出現した、異議申し立ての社会的「発話」ともいえる。つまり、公式には使用されなくなったとはいえ、バブという呼称が醸し出す偏見は現在の女性家事労働者の主体性にまで影を落としている。だからこそ、バブが親密圏のなかで主体化されてきた過程について文学テキストをとおして再検討しつつ、現在の家事労働者自身がバブをどう評価するのかに注目する意義があるのである。

III つながりの平等

上記を踏まえて本稿は、エルウィアナと同じく、香港で働いた経験をもつインドネシア人女性家事労働者によって書かれた一編の短編小説を取り上げて、テキストに現れるバブに代表されるような家事労働者のステレオタイプが女性の主体性をどのように規定し、また打破する可能性を与えるのかについて考察する。これによりわたしたちは、エルウィアナ事件とこのテキストとのあいだに、ある種の関連性を見出すだろう。なぜなら、この短編小説『イェムじゃない』は、エルウィアナ事件をめぐって起きた社会運動と同じように、海外で働くインドネシア人女性家事労働者への差別や虐待を批判するからである。¹⁸⁾

しかしさらに重要なのは、『イェムじゃない』が、インドネシア人家事労働者差別、虐待への異議申し立てだけでなく、その背後にある家事労働全般をめぐる問題までも抉り出したことである。つまり、『イェムじゃない』の最も尖鋭な部分は、家事労働が、「自立した個人」としての男性性を成立させる過程で、無賃・低賃金労働として特定の女性におしつけられた結果うまれた権力関係を浮き彫りにしたところにある。なぜなら、後述するように、幼かったり、弱かったり、病んでいたり、忙しいという理由で、他人のケアを受けるときに生まれる、ケアする人とされる人の間の係わり合い＝「依存関係」を、女性と家庭（親密圏）に押し付ける考

-
- 17) 外国人女性家事労働者への差別や虐待をめぐる諸問題については、すでに多くの研究によって考察されている。Andersen [2000]; Constable [1997; 2009]; Hsia [2009]; Huang *et al.* [2005]; 伊藤・足立 [2008]; Lan [2006]; 小ヶ谷 [2008]; Parreñas [2000]; Romero [2002]; 上野 [2011]などを参照。
- 18) エルウィアナ事件は、外国人家事労働者の権利や義務についての規制が整備されているといわれる香港においても凄惨な虐待が起こっていることを明るみに出したことで、多くの人々にショックを与えた。なぜなら、これまでは、外国人女性家事労働者への虐待が多い国では、女性家事労働者への虐待を罰することのできない現地の法制度や社会システムが虐待を生む原因と考えられてきたからである。（たとえば、サウジアラビア等の中東諸国など。）しかし、香港で起こったエルウィアナ事件は、家事労働者女性への虐待の背景には、親密性労働に対する蔑視という共通の価値観が存在しているという事実を示すこととなった。

え方があったからこそ、バブという呼称による女性家事労働者への支配や差別が起こったという歴史的文脈を、『イェムじゃない』はモチーフとするからである。そこでは、ケアを与える義務を負う人としての女性がケアを受け取るニーズは度外視されてきた。

だからこそ『イェムじゃない』は、登場する二人の家事労働者を、互いに気づかいあう相互関係¹⁹⁾において再定義した。そうすることによりこのテキストは、ケアを担うと同時に、ケアを必要とする主体として家事労働者を描き出したのである。

親密性労働をめぐる倫理哲学研究者のキテイによると、このような、公共領域での「依存の排除」にはじまる、女性への「見返りを求めないケアの与え手」という主体性の押し付けを問い直すためのキーワードが、「つながりの平等」という概念である [岡野 2012: 215-218; キテイ 2010: 154-158]。キテイによれば「つながりの平等」とは、人間の生において、公私の場での役割とジェンダーを問わず、万人が他者の気づかいに依存し、また、他者への気づかいを通して他者からの依存を引き受けるような関係を前提として、人間の自立を達成しようとする考え方である。つまり、ケアを行う者が、ケアを受ける者と同じく、他者によって支えられ、配慮される権利を持つこと、だからこそ、身近な他者が必要としているケアが何かについてそれぞれが注意を払うことが「つながる」という意味であり、このような方法によってこそ、依存に隠されている不平等を克服することができるキテイは述べた。

ここでキテイは、「母もまたお母さんの子どもである」という独特の表現によって、つながりの平等についての議論を展開する [キテイ 2010: 154]。これは、独立した個人が保持する諸権利における平等概念とは一線を画すものであり、たとえば、自分の食事はあとまわしにして家族全員の食卓をまず準備して給仕する母親が、家族のニーズをみとすことにより喜びを感じる一方で、結果として同じ食卓に自分も座ることができなくなり、自分自身も同じような気づかいと尊重を他者から受けられないことに不満を感じるという、アンビバレンツな感情から導き出される。ここで母は、食事の準備を放棄してほかの家族と同じ権利を主張したいと考えているわけではなく、自分が家族の安寧のために奉仕するのと同じように自分も尊重され、感謝や気づかひの態度を示されるよう望んでいると考えられる。つまり、「つながりの平等」とは、ある人が誰かを気づかひ、世話するという、親密性労働が起こる関係性において、親密性労働を担う人を尊重し、安寧を損なうことなくその労働ができるように社会的に支える状況に対す

19) キテイ [2010] によれば、ケアにおける相互関係は、A から B、B から A という相互性に加えて、A は B をケアし、B は C をケアするという場合もあるという意味で、二者間関係だけでなく、二者以上の間の関係をも含む。たとえばこれは、親が自分の子どもの幼少時にケアを与え、子どもも親が老いた時にはケアを与えるというような時間差のある相互関係や、親は自分の子にケアを与え、子は孫にケアを与えるというような世代間の連鎖関係をも含むという意味で、広汎な適用が可能である。つまりこのような相互性は、万人は必ず、ケアを受ける立場にも与える立場にも置かれるということも含意している。

る平等への権利なのである。

この議論は、親密性労働における依存関係を与え手と受け手のあいだのみの関係性でとらえる限りにおいては、不可避免的に不平等なものになってしまうことに前提をおいている。なぜなら、母という親密性労働者が家族のために行う労働は、ある時期までにその労働をうけた人が同じようなやり方でお返しをするような、等価交換に基づく互酬関係の射程ではとらえきれないからだ [同上書：158]。言い換えれば、親密性労働者は、その人が世話する人と平等であるというよりは、親密性労働者自身がある人を支えているのと同じく、彼／彼女（親密性労働者）を支えている関係に対して権利をもつと考えることで、社会の中の入り組んだ関係性のなかで発生する「気づかいの義務」の向きが、親密性労働者から労働を受け取る人へ向かうだけでなく、親密性労働者たちとつながりのある人々から親密性労働者自身にも向かうと考えることができる [同所]。このことは、エルウィアナ事件と『イェムじゃない』の両方において問題の端緒となっている、家事労働者が他者の気づかいを受けるニーズは度外視する、または家事労働者ならば他者からの支配や虐待を受けても仕方がないとみなすような考え方への強い反証となる。

これを踏まえて本稿は、『イェムじゃない』に登場する二人の家事労働者が、互いを気にかけるながらも支配せずに、互いのありかたを尊重しあう関係性としての「つながりの平等」を具現化させる過程について詳しく検討する。それによりこのテキストが、バブという蔑称に含意されるような家事労働への慣習的差別を批判するとともに、他者からの虐待をも拒絶できないような一方的な依存関係を引き受ける存在としてではなく、個別のニーズや事情を抱え、気づかれケアされる権利をもつ主体として女性家事労働者を描くさまを考察する。

上記のような目的を踏まえ、以下では次のように議論を展開する。第一に、家事労働が「親密性労働」のひとつとしてジェンダー化され、家庭をはじめとする親密圏に押し付けられてきたこと、そして、親密性労働を担う女性は、他者からの依存を一方的に担うべき存在として定義されてきた点を確認する。

第二に、『イェムじゃない』が書かれた社会的背景について、インドネシアにて女性家事労働者が文学出版をおこなう際のステイグマとその克服を含めて簡潔にまとめる。第三に、既存のインドネシア語文学において描かれてきた「バブ」の表象を分析し、女性家事労働者が親密圏における「犠牲者」「誘惑者」あるいは「都合のよい存在」として主体化されてきたことを例示する。その上で、『イェムじゃない』のテキストが、前述の文学的表象を逆手にとりながら二人の女性家事労働者の出会いと別れを描き、他者を気づかうことで自己が発現するような関係性である「つながりの平等」を通して、親密性労働者が他者の気づかいを受け取るニーズに光をあてる過程を検討する。

IV 親密性労働に対する偏見——公的/私的領域と依存関係のジェンダー化²⁰⁾

家事労働は、『イエムじゃない』とエルウィアナ事件の舞台、香港とインドネシアを含む多くの社会にて「(貧しい) 女性の仕事」というステレオタイプで捉えられてきた [Andersen 2000; Constable 2007; Hondagneu-Sotelo 2007; Lan 2006; Parreñas 2000; Romero 2002; Weix 2000]。²¹⁾

これには、家事労働が、広義の「親密性の労働 (intimate labor/intimate work)」の一部であり、人間の生命活動のすべてを円滑に運営するために、ある個人の性的欲求の充足、良好な身体と精神状態の維持、他人を愛し、他人との情緒的関係性の構築と維持するなどの「親密的な要求」を満たすべく世話をする労働であることが関係している [落合・赤枝 2012: 3]。²²⁾

人間は誰でも、人生の多くの部分で、食事の用意、衣服の洗濯や、住居の清掃などの親密性労働をさまざまな他者に引き受けてもらうという意味での「依存関係」²³⁾ と無縁ではいられない

- 20) インドネシアが歴史的に、いわゆる「公私二元論」を超える多様な家族概念をもつ地域であったことは、数々の学術研究によって例証されている。したがって本稿が、公私二元論をインドネシア社会に当てはめる分析手法には問題があるという見方があるかもしれない。これについて本稿は、インドネシアが公私二元論に収まりきれない豊かな家族関係を生み出してきた事実は、インドネシア語文学作品を公私二元論の視点から分析することを退ける理由にはならないと考える。たとえば、本稿中のプラムディヤの作品は、近代性の生み出す負の側面 (例えば植民地支配など) に立ち向かう人々を、家族関係を通して描写しており、リヌス・スルヤディの作品も、親密圏で生きる女性家事労働者の生きざまを公共圏との対比によって描いている。これは、インドネシアにて公私二元論が少なくとも一定の影響を及ぼしてきたことの証しであろう。つまり本稿は、親密圏の視点からの再検討により、これらの作品の解釈の可能性をさらに押し広げようとしている。
- 21) インドネシア (蘭領東インド) においてはバブ、香港においても、妹仔 (mujjai) や阿媽 (amah) などの女性家事労働者を持つ慣習が 20 世紀以前からあったと見られている。バブについては本稿にて解説したが、香港の例についての詳細は Constable [1997: 41]; Watson [1991: 243] 参照。また伊藤 [2008: 28-29] は、とくに妹仔が、香港社会では伝統的に「女兒奴隸」として、主人への隷属を強制される存在であったことが原因で、人々が外国人家事労働者に対する虐待と差別を当然のこととみなすような価値観をもつようになったと指摘している。
- 22) 親密性労働とは、家事労働、性労働やケア労働などと部分的に重なる分析概念であり、文脈によっては、ケア労働、再生産労働と呼ばれる [伊藤・足立 2008: 9]。落合・赤枝は、親密性労働が場合によっては再生産労働とほぼ同義であることを認めながらも、再生産労働という概念の使用には問題があると述べた [落合・赤枝 2012: 5-9]。なぜなら、再生産労働という概念は、生産労働と再生産労働の二項対立性ととも、公的領域と私的領域の二元論における、私的領域と家族制度の一致を前提とするかのような誤解を招きやすいからである。落合は、死亡率と結婚率が低下している現代社会の多くで、「家族」の形態も変化しているため、家族と私的領域は必ずしも一致せず、いわゆる再生産労働を行う関係性や空間を画一的な「家族」に限定することは現状にそぐわないとして、「親密性労働」そして「親密圏」を使用している。これを踏まえて本稿は、親密性労働が行われる空間と社会関係を包括的に「親密圏」という概念にてとらえ、家族はその一つであるという理解を採用する。
- 23) キテイによれば、親密性労働における「依存関係」とは、親密性労働の受け手が親密性労働の行為者に本質的に依存していなくても成立しうるものであるが [2010: 85-86]、このような「依存関係」

いからこそ、親密性労働は重要である [同上書：4]。しかしながら、家事労働を含め、これらの親密性労働は、歴史的に女性によって低賃金・無賃金にて担われ、市場経済に直接かかわる労働よりも経済的価値が低いとみなされてきた [同所]。²⁴⁾

このような親密性労働にたいする軽視は、「公的領域」と「私的領域」の分離とジェンダー化を伴って出現したことは、よく指摘される事実である [江原 2014: 558; 落合 2013: 5; フレイザー・ホネット 2012: 24]。²⁵⁾ たとえば、西洋近代思想をはじめとして見られる、男性性を公的領域に、女性性を私的領域に結び付ける価値観が、政治的諸権利を持つ成人男性のみを公的領域に包摂する一方で女性を排除し、家庭などの親密圏にて親密性労働を担わせることとなった [フレイザー・ホネット 2012: 74]。このような公的領域における「女性の忘却」は、さらなる帰結をもたらした。まず、公的領域から、女性のみならず、子ども、老人、病人などの、親密性労働に大きく依存せざるを得ないような人間を除外した結果、親密性労働における他者への「依存関係」は「望ましくない状態」として認識され、公的領域からは排除されるべきものとして社会に内面化された。こうして、私的領域に追いやられた「依存関係」——つまり、親密性の労働を引き受ける人間と、その受け手の関係性——は、依存される側の依存する側への一方的な奉仕としてとらえられるようになった [江原 2014: 558; 岡野 2012: 49]。結果として、公的領域においては他者への依存は否定され、他者からの依存を引き受ける親密性労働は「女の仕事」かつ「無賃金／低賃金労働」として私的領域に囲い込まれ、近代家族制度のヒエラルキーに組み込まれていく。そこでは、「家事労働者」は、「妻」と同じく、家庭内の親密性労働を担っていても、いわゆる「女中／下女」として、家族内での権力関係では最も従属的な地位におかれることとなった。こうして家事労働は、妻が行えば「女の仕事」といわれ、家

は、多くの社会にて日常的に見られるものである。たとえば、母親（または父親）が、ある程度の年齢に達した子供の世話を焼くことや、妻が夫、または夫が妻の世話をするなどのケースである。これらの状況において、後者は前者がいないと生命が脅かされるほどの依存はしていないにせよ、満たされた家庭生活や職業生活を送る上では前者からの親密性労働に頼っているといえる。そしてこれはさらに、親密性労働における依存関係の相互性ないし互酬性をも示唆する。たとえば、両親と子ども、妻と夫は、それぞれのおかれた状況は違うにせよ、後者（労働の受け手）が前者（労働の行為者）の心遣いに依存するのと同時に、前者もまた、後者が前者の労働を尊重し、ありがたく思うことによって、自己の労働の価値を見出す。換言すれば、親密性労働は、行為者と受け手が、互いへの信頼と思いやりの関係で結ばれてはじめて成功するのである [同上書：91-92]。

24) 落合・赤坂 [2012: 4] は、親密性労働の特徴として、(1) 労働を行う者と受けとる者とのあいだに相互依存的な関係性を形成すること、(2) 女性による低賃金、無賃金にて引き受けるべき仕事であるとみなされてきたこと、(3) (2) の結果として、下層階級や民族的よそ者がすべき仕事だと考えられてきたという共通性を指摘している。

25) 「公共／公的領域」ないし「公共圏」の定義については、主に国家を想定する立場と、ハバーマスに代表される市場経済にもとづく市民社会を想定する立場がある。ハバーマスによる公共圏の議論は広く支持されながらも、彼の公共圏の定義には女性やその他マイノリティの視点が欠けているという指摘がなされ、多くの議論がなされてきた [フレイザー・ホネット 2012]。本稿は、このようなハバーマスによる公共圏定義とそれをめぐる議論の蓄積を踏まえて公共圏をとらえている。

事労働者が行えば、「貧しい女の仕事」として、ジェンダーと経済力などの指標に分岐する、複合的差別による軽視と低賃金化の対象となった。そして、この図式の最下位に位置する家事労働者が受け取るべき親密性労働のニーズは、最も看過されやすい立場におかれることとなったことが、女性家事労働者への差別の礎石となったのである [岡野 2012: 49]。

V 短編小説『イエムじゃない』

この短編小説は、かつて海外で家事労働者として働いたことのある作者、エティツ・ジュウイタ (Etik Juwita) によって書かれた。この作品は、当初、ジャワ島の主要新聞である「ジャワ・ポスト」の2007年6月10日版の日曜文芸欄に掲載された後、全国紙を中心とする有名紙に掲載された文芸作品 (詩と短編小説) を対象に選考される2008年度「金のペン文学賞」において、第5位に入賞した [Anugerah Sastra Pena Kencana 2008]。

著者エティツは、現在、30代半ばのインドネシア人女性である。東ジャワのブリタル出身で、高校卒業後、シンガポールと香港にて家事労働者として働いた経験を持つ。このような経歴をもつエティツの文学賞受賞は、国際移住女性家事労働者の受賞として話題になった。

このような話題性の理由のひとつは、インドネシアにおける文学出版が、1990年代後半まで、都市部に住む知識層男性著者に席卷されていたことだと考えられる [Hatley 1999: 451-452; Suryomenggolo 2012: 605]。もちろん、だからといって、それ以前のインドネシアには女性著者が存在しなかったということではない。たとえば、権威主義的といわれたスハルト政権が崩壊する直前にベストセラーとなる第一作を発表し、その後の女性による出版ブームの火付け役になった女性作家アユ・ウタミ (Ayu Utami) は、国際的にもよく知られた存在である。²⁶⁾ しかしアユは、インドネシア大学に入学したのち、ジャカルタでジャーナリストとして働いた経験をもつ、都市部知識層女性であった [Hatley 1999]。その意味では、都市部に住んで高学歴である限り、女性であることは、必ずしも著書出版のハンディキャップにはならないが、僻地に住み、大学教育を受けない層が著書を出版することには、男女にかかわらず困難がともなうというのが、当時のインドネシア語出版についてのより正確な記述であろう。²⁷⁾ 換言すれば、インドネシア語の文学出版には、女性が少数派というジェンダー間不均衡と、非都市部在住で大学教育を受けない層への障壁という、居住地域や教育水準からみた不均衡が混在していたといえる。このような状況があったからこそ、おもに村間部出身で高等教育を受けたこ

26) アユの所属する芸術団体コムニタス・サリハラ HP によると、彼女は、2000年にオランダのプリンス・クラウス賞、2008年には東南アジア文学賞を受賞している [Komunitas Salihara 2014]。

27) 2008年6月17日、マーク・ホバート教授との面談により得たコメント。筆者が2006-08年に行ったインドネシアの文学創作コミュニティについての現地調査においても、同じ印象を得た。

とのない女性家事労働者が文学作品を出版し、ましてや文学賞を受賞することは、社会的快挙とみなされたのである。²⁸⁾

海外で働くインドネシア人女性家事労働者による出版は2002年頃から出現し始めたが、この種の著者は、教育水準の問題から、文学創作に必要なスキルをあらかじめ持っているわけではないケースが多い [Sawai 2009: 11]。したがって、彼女らは、海外での移住労働時に、現地のインドネシア語新聞に投稿するなどして、メディア編集者との個人的ネットワークなどを広げ、インターネット上のコミュニティにも積極的に参加しつつ、執筆のスキルを向上させ、出版のチャンスを得てきた [Sawai 2009]。エティツも、香港滞在中に、現地のインドネシア語新聞の記者やインドネシア在住の編集者などとの交流を通して文学創作のキャリアを積み重ねていった経歴を持ち、²⁹⁾ 家事労働者のためのNGO活動家や社会運動グループとの親交を通して家事労働者への虐待や差別などについての問題意識を共有していたことが、『イェムじゃない』のような作品を書く背景をなしていると考えられる。その意味で『イェムじゃない』は、当時のインドネシアでの文学出版におけるジェンダーと社会階層などに分岐するスティグマを乗り越えて生み出された作品であると同時に、香港のインドネシア人女性家事労働者による社会運動の隆盛の産物でもあるといえるだろう。

VI インドネシア語文学における女性家事労働者のイメージ——「バブ」

1. 親密圏の犠牲者としてのバブ——『イネム』

インドネシア語近代文学の第一人者とされるプラムディヤ・アナンタ・トゥール (Pramoedya Ananta Toer) による短編『イネム (Inem)』(1952) は、東ジャワの地方都市プロラを舞台に、わずか8歳で結婚させられるバブ、イネムについての物語である。

イネムは、語り手の家で家事手伝いとして働く、近所でも評判の美少女で、語り手の少年の遊び友達でもある。ある日、イネムの母が語り手の母を訪問し、結婚を理由に、娘を自宅に連れ帰ろうとする。語り手の母 (イネムの雇い主) は、あまりに早い結婚を心配し、イネムの母に考え直すよう説得しようとするが、イネムの母は、娘が「行き遅れ」になっては困ると言って譲らず、結婚式は予定どおり行われる。しかしその後、幼さゆえに結婚の意味をほとんど理解していないイネムと夫の間に対立が起こり、彼らの新居からはイネムの泣き叫ぶ声が聞こえ

28) 2011年には、Jurnal Perempuanによって発行されたインドネシア人女性についての短編小説の英文翻訳集 *I am Woman!* にエティツの作品が収録されたことも、エティツへの注目度の一例であろう。

29) 2010年7月23日、エティツとの個人インタビューより。エティツは、当時の香港のインドネシア語メディアの中でも批判性が高く、インドネシア人家事労働者への人権保護などの社会問題にコミットしていた Suara 紙の編集者たちと特に親交が深かった。

るようになる。ある日、イネムは語り手の母を訪問し、再びお手伝いとして受け入れてもらうように頼むが、8歳であっても「出戻り」であることを理由に、語り手の母は受け入れを断る。

「私、今はもう、夫はいません。」

「おまえ、もう離婚したの？」母は訊いた。

「はい、奥様」

「何でおまえ、旦那と離婚したの？」

イネムは答えなかった。

「おまえ、旦那にちゃんと尽くさなかったのかい？」

「私、いつもあの人によく尽くしたと思います、奥様」

「おまえ、旦那が仕事から疲れて帰ってきたら、ちゃんと体をもみほぐしてやったかい？」

母は、事情を探るために訊いた。

「はい、奥様、奥様に言われたことは私、全部やりました。」

「それなら、なぜ離婚したの？」

「奥様、あの人はいつも私を殴りました。」

「殴った？こんな小さい子を？」

「私、もうできる限りあの人に仕えました、奥様。それでも、あの人が私を殴って、私が痛い思いをすれば、これも尽くしているうちに入るんでしょうか、奥様？」

……母は押し黙った。目は、イネムのほうを押し量っていた。

「殴るなんて。」そして母はつぶやいた。

「はい、奥様。殴られました、父さんや母さんが私を殴るみたいに。」

「たぶん、おまえはやっぱ旦那に尽くし足りなかったんじゃないかしら。夫たるもの、妻が本当に尽くしていれば、殴ったりするわけありませんよ。」

イネムは答えなかった。かわりに、話を変えた。「奥様は私をまた働かせてくださいますか？」

母は答えにはためらわず、はっきりとこう言った。「イネム、おまえは、今はもう出戻り(djanda/janda)なのです。ここには、もう大きい男たちがたくさんいるわ。よそ様の目から見て良くないと思わない？」

「でも、兄さんたちは、私を殴ったりしません。」……

「そうじゃないの。大人の男がたくさんいるところで、おまえみたいな若い出戻りがいたら、世間様から何ていわれるか。」

「イネムのせいなんですか、奥様」

「違うのよ。礼儀の問題なの。」

「礼儀？礼儀のために、私はここに置いてもらえないのですか？」

「ええ、そうなのよ、イネム」 [Toer 1952: 39]

この作品は、20世紀前半にジャワ島の貧困家庭に生まれた少女に降りかかる不幸を象徴的に描いている。まず、当初、家事労働者として働かされていたイネムが、ジャワにおける早婚の慣習によって、8歳にして嫁に出されるという筋立てからは、娘をバブにするよりも、結婚させることで結納金などの収入を得るほうが得だと考える貧困家庭の論理が垣間見える。こうして、両親によって家事労働者と妻の間で値踏みされ、結婚させられたイネムは、夫からも暴力を受け、婚家から逃げ出したのちに離婚して、「出戻り (janda [インドネシア語]：未亡人と離婚経験者の両方を指す)」となり、再びお手伝いとして受け入れてほしいと、語り手の母である「奥様」に頼みにいく。そこで、夫への奉仕が足りなかったのではないかと「よき妻」としてのモラルを問う語り手の母に対して、イネムは「夫に殴られて痛みを感じることも奉仕なのか」と問い返す。これは、妻として名づけられたのちも夫の暴力にさらされ、自己犠牲によって夫との依存関係を担うことが強いられるイネムが発する精一杯の抗議であるが、こんな彼女の訴えを気づかい、助ける人はいない。たとえば、「出戻り」と名指され、夫の支配からこぼれおちたイネムが、他の男性を誘惑する道徳的脅威とみなされることを自覚する語り手の母は、イネムを受け入れることによって自分の家庭がトラブルに巻き込まれるのを避けるために、この頼みを断る。こうして、他に行くあてのないイネムは実家に戻り、その後も、両親や親族から暴力を受けつづける。

この作品は、早婚の慣習のせいで、バブから「妻」へ、そして「出戻り」と呼び直されながら、夫と妻、父母と娘のあいだの依存関係における犠牲者となり続けるイネムの姿を描いている。そしてこれは、「奥様」「母さん」「妻」「バブ」「出戻り」と呼び名こそ違えども、親密圏内にて女性どうしが埋め込まれた支配関係をも浮かびあがらせる。

たとえば、イネムの実母は、結婚後、娘が夫に虐待されていることを知りながらもそれを容認し、教養のあるはずの語り手の母親も、自分の家庭を守るために黙認するしかない。このように、女性に親密圏内の依存関係における奉仕者となることを強いるモラル（たとえば、夫／父親の欲求を満たすのが女性の責任であり、正しい妻／娘のあり方であるというような）が女性同士の連帯を阻害し、幼さゆえに、明らかに他人への依存を必要としているイネムが虐待を受けても、他の女性はそれを容認せざるを得ないというこのテキストの文脈は、家事労働者への支配や抑圧が、男性だけでなく、女性たちによっても黙認、維持されてきた事実を浮き彫りにしている。そしてこのような筋書きは、結果的にバブを無教養や従属性によって主体化することとなった。

2. 親密圏の攪乱者としてのバブ——『下男とバブ』

同じくプラムディヤ・アナンタ・トゥールの『下男とバブ (Djongos+ Babu)』(1957)は、20世紀前半のオランダと日本の支配を受ける蘭領東インドの首都バタヴィアにて、プリブミのバブがヨーロッパ人と性的関係をもった結果生まれたユーラシアン(欧亜混血児)の兄妹を主人公とする物語である。この兄妹が成長し、それぞれ、下男とバブを職業とするようになった際に持つ階層上昇の野望を通して、この作品は「依存関係における欲望」を描き、バブをめぐる支配関係が、ジェンダーとエスニシティ、階層などの複合的要素からなることを示した。

ユーラシアンとして美しさに恵まれた妹、イナーは、その資質を生かして、ヨーロッパ人の雇用者の妾(ニヤイ: nyai [インドネシア語])になれば、財力を手に入れ、支配階層の仲間入りができると信じている。そこで、イナーは兄のソビと協力して、何とか「ヨーロッパ人」と性的関係を持つと画策する。この姿を通して、雇用者のバブへの性的依存関係を逆手にとった物質的欲望が描かれる。

そうだ、それでいい——ソビは、妹のほうを見ずに口をはさんだ。もう少しすれば、俺たちはこのネズミの巣とおさらばだ。……お前がもう旦那を手に入れたら——彼は、妹を見やってこう言った——いい子にしてうまくやるんだ、後で後悔しないようにな。初めは、何でも相手のいいなりになれ。そのあとで、金や宝石をおねだりするんだ。隠しときやすいからな。そんでもって、きれいな洋服なんかは——簡単なこった——あとでひとりでにやってくるんだからよ。[Toer 1957: 15]

ここで兄は妹に対し、まずはほろをまとったバブとして「奥様」を油断させてから、「奥様」の留守の隙について主人を誘惑し、妾の座を狙うよう指南する [ibid.: 14]。そして、最初はとにかく服従し、ご主人の信頼を得た折には、貴金属や高価な衣類などがほしいままにできると述べる [ibid.: 15]。このような描写からは、バブ(とその兄)が、服従と引き換えに、金品などの見返りを目当てに男性を誘惑するような狡猾さをもつのが見てとれるのは明らかであるが、果たして、それだけなのだろうか。

シーゲル [Siegel 1996: 43-44] が指摘するように、妾とは、自らがおこなう親密性労働に対しての賃金は与えられないが、主人の意向次第で、金品や資産などの「個人的な需要」を満たしてもらえするという意味で、バブよりもさらに隷属的な状態にあるといえる。しかし、妾の行う親密性労働の交換条件のあいまいさは、実は「妻」、そしてバブにも通じる部分がある。たとえば、「妻」は、「夫」との家庭での親密性労働を無賃で請け負う代わりに、妻としての法的権利を得る。妾は、「夫」と性的関係をもつ見返りに金銭的報酬を受け取り、バブは、無賃金

または低賃金で親密性労働を行うが、この二者は妻と同等の法的権利を与えられることなしに雇用者の親密圏に包括されている。

つまり、そもそも、親密性労働の「適正な対価」が、請け負う人間の呼び名（「妻」「妾」「家事労働者」）によって区別されてきたという任意性を勘案すれば、イナーが、自らの引き受ける雇用者の親密性労働の見返りとして最大限の利益を引き出そうとするのは、理にかなったこととも考えられる。それにもかかわらず、この種の振舞いは、ニヤイの計算高さや抜け目のない狡猾さとして主体化されてきたことを、このテキストは問題提起しているのである。

こうしてイナーは、バブと妾の境界を行き来しながら、肉体的魅力を武器にできる限りの利益を引き出そうとし、イナーの兄は、ヨーロッパ人雇用者の娘と性的関係をむすぶことで支配者階層として社会的優位に立つことを夢見る。このように本作品は、親密性労働をめぐる支配関係が、エスニシティや社会階層に分岐することを示しながら、バブを狡猾な誘惑者として主体化したのである。

3. 親密圏における「都合のいい女」——『パリエムの告白』

リヌス・スルヤディ（Linus Suryadi, Ag）の『パリエムの告白（Pengakuan Pariyem）』（1981）は、中部ジャワの古都ジョグジャカルタを舞台に、貴族の家庭で働くバブのパリエム（イエム）の語りである。この作品は、詩と散文のあいだのような形式で、パリエムをとりまく日常世界——日々の仕事や、周囲の人間との交流に加え、雇用者の息子と性的関係を持ち、子供を産むまで——を、パリエムの視点から描き出す。語りの中では、パリエムが雇用者の息子と性的関係をもったことは、率直な喜びとプライドでもって捉えられており、上述のイナーのような、財力への欲望は見られない。また、パリエムが息子の子を身ごもったと知った雇用家族は、パリエムとその子に対して物心両面の面倒を見ようとする。このようなバブと雇用家族との良好な相互依存関係は、伝統的なバブの役割を踏襲してはいるが、搾取や物質的欲望の対象になりがちであったバブを、バブ自身の視点から描くという斬新さから、高く評価されてきた。

ええ、ええ、私がパリエム
正確には、マリア・マグダレナ・パリエム
日ごろは「イエム」って呼ばれてる
グヌン・キドゥル出身で
ジョグジャカルタのスルヨムンタラマン邸で働く
カンジェン・チョクロ・セントノ様のバブ

私、すでに受け入れているわ
私、楽しんでいる
もしこれが、すでに私の運命とされているなら
バブになるのに、一体何の問題がある？
神様は、最も公平なお方
私は、神の決め賜うた運命に従うだけ
今、インドネシアは、バブの危機……

なぜなら、これが法則なのだから
将軍がいて、部下がいる……
主人がいて、従者がいる……
教師がいて、生徒がいる……
プリアイがいて、バブがいる……
この二つは、切り離せない
二つがひとつで、ひとつが二つ……
でも、人間の品位を測るのは
階級が基準じゃない
(それぞれの) 役割と義務があるからこそ
わたしたちは、階級をもつ [Suryadi 2002: 29-30]

上記の語りからは、パリエムがバブであることを自分の運命として受け入れ、享受している様子が見受けられる。このようなパリエムの率直さは確かに新鮮な視点ではあるが、後述するように、誰の立場を代弁しているのかについては、再検討の余地があるだろう。

若く従順で肉付きがよく、長い黒髪を持つ、「理想の」家事労働者としてパリエムは語る。

一日が、東の山ぎわから始まる
静寂の朝焼けの中で
庭の木の葉から
重みに耐えかねて、朝露が落ちる
私のはびをする —— 感謝の気持ちとともに ——
長い髪をまとめながら
「私が初めにやることは、歯磨き
ペプソデント（歯磨き粉）のコマーシャルに出てくる映画スター、オリビア・ハッセーの

ように

それから、ばしゃばしゃと水浴びをする

裸で——毎朝の私の儀式

シグラ・ミリルのように（流れにのって）鼻歌を歌いながら

ライフボーイせっけんの、よい匂いにつつまれて

心地よい冷気を吸い込む

自然の中で、ひよどりのさえずりがきこえる……」

口と息の良い匂い

私は、うがいをしながらきれいにする [ibid.: 30-31]

その後、パリエムは、地元の名門大学に通う雇用者の息子、「若旦那様」に求められて性的関係を持ち、妊娠して女の子を出産する。パリエムの語りでは、「若旦那様」の父母、妹、他の使用人、実家の家族すべてが、彼女に協力的である。

パリエムをマグダラのマリアと重ねあわせ、ひとりの人間として、愛と信仰の間で罪の意識に悩みながら揺れ動く様子を描くりヌスの筆力は評価されてしかるべきだろう。しかしその一方でこのような姿は、当時の社会が自明としていたバブの社会的地位を如実に浮かび上がらせてもいた。

たとえば、パリエムのこの「愛の賛歌」は、語りの主張とは裏腹に、自分のバブとしての低い立場を不問にすることで成立している。パリエムは、息子の子供を生んだがゆえに雇用家族から大事にされるが、パリエム自身が、「妻」として公認されてはいないことは、ここでは完全に忘却されている。例えば、パリエムの娘が1歳になった頃、パリエムがバブの仕事に戻ることを理由に、娘はパリエムの実家に預けられる。もし、本当にパリエムと娘を雇用家族に迎え入れるのであれば、娘を妻の実家に預けるという選択肢は考えにくい。そうなると、やはり、雇用家族がパリエムと娘を、「家族と同様」でありながら、「正式な家族未満」として見ていることは明白である。換言すれば、パリエムは、雇用家族と血のつながった子どもを出産することを含めた親密性労働をおこなっているにもかかわらず、彼女とその子どもは「若旦那様」とその家族の親密圏には「条件付き」で包括されている。つまり、パリエムは、「若旦那様」とその家族から見て都合のいいかたちで親密圏に含まれたり除外されたりする主体として扱われており、パリエムの一見、天真爛漫な語りは、バブとして自分が埋め込まれている親密圏の曖昧な境界と不平等性を「愛される喜び」でもって上書きすることで、このような権力関係におけるパリエムの不利な立場を帳消しにしているとも解釈できる。こう考えると、パリエムの表象は、前出のイナーと同じく、バブと妾と妻という、親密性労

働を担う女性の範疇の裂け目に出現したフェティッシュ³⁰⁾といえる。

まとめると、上記の三作品では、貧困層出身で高等教育を受けていない女性が、イエム、イネム、イナーなどの同韻をふむ簡素な名前にて、バブを主体化している。これらの作品でバブと名指された女性たちは、いわゆる公的領域での言説が抑圧、忘却しようとする「依存関係」——つまり、さまざまな親密性労働を担うことで家事労働者が埋め込まれるジェンダー、エスニシティと階層に分岐する支配関係——について、特定の女性（そして男性）の従属、または、財力や愛情などの見返りへの欲望を再現させ、ときには、支配者側に都合のよい論理で上書きしている。

そしてこの結果、バブと名指された女性たちが感じていたかもしれない、暴力や支配にさらされることへの怒りや悲しみ、他者の依存を引き受ける際の対価を任意に決められてしまうことや、自らが他者に依存するニーズは無視されてしまうことについての異議などの発話はかき消されてしまうこととなった。このような主体化の歴史的な積み重ねとともに、現在の国際移住女性家事労働者は、犠牲者、または、個人的利得のために雇用者を利用するような、狡猾さ、性的放埒さなどの複数のステレオタイプでみられるようになったのである。

むしろ、上記三作品におけるバブへの眼差しが、当時のインドネシアにおける近代性を社会的周縁者の立場から批判的に描き出すことを可能にしたという点は、先行研究においてもすでに評価がなされている [Cheah 2003; Day 2001; Siegel 1996; Weix 2000]。しかしながら、このような作家たちの鋭い眼差しが、はからずもバブについてのステレオタイプを鮮烈に印象づけることとなったという皮肉な事実は、これらの作品を親密圏におけるジェンダー複合的差別の視点から分析することによってはじめて焦点化する側面だといえよう。

このように、近代性批判という目的のためとはいえ、バブのステレオタイプ化に抗うことは著名な作家にとっても難題であったとすれば、いわんや女性家事労働者たちがこの種のバブの主体化について文学的に異議申し立てできるような契機はこれまでほとんど存在しなかった。こうして、社会言説において彼女たちが常に他者によって呼びかけられ、家事労働者であることの意味を決められてしまう状況に風穴をあけた動きのひとつが、『イエムじゃない』の上梓であったのである。

30) 精神分析学で使われるフェティッシュとは、ある受け入れがたい真理に対し、象徴的に対処するために妥協してあてがう代替物を指す [チルダース・ヘンツイ 1998: 175]。しかし、いかなる代替物もこの真理を完全に置き換えることはできないため、ある置き換えの所作がさらなる置き換えを呼ぶ無限ループを引き起こす。本稿においては、フェティッシュとは、受け入れ難い真理を代替する記号という意味で使用する。

VII 『イェムじゃない』が立ち上げる主体性

1. 『イェムじゃない』——不気味なもの

『イェムじゃない』は、前章でとりあげた既存の文学作品三作と同様、バブの表象によくあるイェムという名の家事労働者を主人公にしているが、ここでイェムと名づけられた主人公は、自分に期待される役割をあからさまに否定し、むしろ、まったく対照的なイメージとともに登場する。

作者、エティツの経歴は、『イェムじゃない』が新聞に掲載された時点で公開されていたため、当時の読者は、「私」とエティツの背景の重なりを理解した上で、この作品を解釈したと考えられる。また、この作品は、二人の国際移住家事労働者、イェムと「私」を主な登場人物としており、語り手の「私」が、主人公のイェムとの経験を第三者に語るという体裁をとっている。

ストーリーは、イェムと「私」が、ジャカルタのスカルノ・ハッタ国際空港に降り立ったあと、ジャワ島各地に向かう送迎車サービスの車内に乗り合わせるころから始まる。「私」は、休暇をとってシンガポールからの一時帰国の途にあり、イェムは中東からの永久帰国組である。「私」は、シンガポールでは、裕福で理解のある雇用者に恵まれ、同じ家で働く二人の家事労働者とともに犬の散歩と家の掃除をするのが仕事だという、幸運な家事労働者である。加えて「私」は、若く健康で、責任感と知性も併せ持つ、理想的な家事労働者であることが語りによって示される。

一方、イェムは、バブとして典型的な名前を持ちながら、実は理想的な家事労働者像からはかけ離れていることが、「私」の目を通して語られる。

「あんた、信じられる？私の友達に、故郷に帰るときに、雇用者の赤ん坊を洗濯機の中に突っ込んだのがいるって」感情の感じられない声で彼女はいった。

……「あたし、雇用者の子供のミルクに、ネズミとりの毒をまぜたことがあるわ」と彼女は言った。

……「お姉さん、子供は何人？」

……「生きてるのが3人。墮ろしたのが3人」[Juwita 2008: 61-64]

上記の会話によって、「私」は「テロ攻撃にあったような戦慄」を覚える [ibid.: 61]。なぜ

なら、イエムの「雇用者の赤ん坊を洗濯機に突っ込んだり、毒入りミルクを飲ませる」「実子を平気で殺める」発言は、「愛情深い代理母」というような、理想の家事労働者像をあからさまに逸脱するからだ。加えて、語り手は、同じ女性としてだけでなく、同職の人間として、外貨獲得に貢献する「国家のヒーロー」[Huang *et al.* 2005: 7; Sim 2007: 10] として称揚されている国際移住家事労働者の職業意識を踏みにじるようなイエムの発言に義憤を感じているともいえる。労働条件に恵まれ、絵に描いたような模範的家事労働者として働く「私」は、国際移住家事労働者の送り出し政策の推進に同調するに十分な理由をもっているからこそ、ストーリーの中で「海外で働くインドネシア人女性家事労働者」の「超自我」³¹⁾を代弁しているとも解釈できるからだ。一方、イエムの方は、同じ家事労働者にもかかわらず、残酷なだけでなく、異様で醜悪でもあることが暴露される。「私」の視線は、イエムが年老いて、貧しく、醜く、さらに心身を病んでいるような様子を暴き立てる。

心の中で、私は、自分の目の前の女性はたぶん 40 歳くらいだと考えた。頬が落ち込み始めて、時に一瞬のライトの反射でちかちかと光る、安っぽい金色の入れ歯をしている。手の爪はがたがたに切られていて、まるで気がふれた人のようだ。目の周りは、まるで一晩中夜更かしする博打打ちのように黒ずんでいる。やせた体に、筋の突き出た肌、乳房は垂れている。このおばさん、たぶん本当に精神的におかしいのかもしれない。まったく、いらつくったらありゃしない！ [Juwita 2008: 63]

彼女は、長時間車内に閉じ込められたせいで、排水溝のようなにおいを放つ口臭が感じられるくらい、私の耳に唇を近づけた。[*ibid.*: 62]

上記のイエムの様子は、前述のバブ三作品における、年若く健康で、従順かつ性的魅力を持つ、雇用者男性に都合のよいバブの主体性とは正反対である。例えば、イエムの「排水溝のような口臭を放つ」口は、『パリエムの告白』におけるパリエムの歯磨き粉の芳香を放つ口元とは対照的である。

イエムのこのような醜悪さの描写は、逸脱的イメージを利用して、所与のものとされている社会通念を露呈するという、フロイトの「不気味なもの」[フロイト 2006] という概念を想起させる。フロイトによれば、親しみのある対象に、あえて普通ではない意味や性質を付与することは、元々親しみのあったその対象を「不気味なもの」として再現前させる効果を持つ。そ

31) 超自我とは、精神分析において使用される審級であり、たとえば人間の良心のように、自我の行動と意図を監視し、善悪を判断するという、いわば検閲行為を行う役割を担っている [フロイト 2006: 272-273]。

してその不気味さこそが、これまであえて気にも留めなかった対象の意味を再考するきっかけを与えてくれるのである。つまり、イエムの不気味な醜悪さは、わたしたちが日ごろ親しんでいる家事労働者のイメージを再検討させる効果をもつ。

たとえば、ここでのイエムの醜悪さは、上述の『パリエムの告白』に出てくるような、美しく従順で働きものという家事労働者のイメージとは正反対であるが、バブが「代理母／妻」としての自分の役割を全うした後のいわば「使用後」の姿と考えれば、当然のこととも思われる。考えてみれば、低賃金で親密性労働を引き受けた結果、イエムが肉体的にも精神的にも疲弊したと考えれば、それはごく自然な帰結であろう。それにもかかわらず、イエムの醜悪さにいらだちを感じる「私」の語りこそが、裏を返せば、家事労働者に都合のよい役回りを押し付ける社会通念を代弁しているともいえる。換言すれば、「私」のいらだちは、家事労働者自身が、他の家事労働者に対して無意識的に幻想を押し付けてしまうほどに、バブという名づけが社会に内面化されているということを暗黙のうちに物語っているのである。

2. オルタナティヴな家事労働者の主体性の立ち上がり

語りの冒頭では、イエムを家事労働者として不適格とみなしていた「私」だが、その後、イエムの生い立ちが明らかになるにつれて、「私」のイエムに対する見方がだんだんと変化していく。さらに、二人が帰宅の道程にて問題をともに解決する過程により、「私」がイエムの主体性を理解し、共感を深めることとなる。

車中にて会話を交わすうちに、「私」は、イエムが夫に先立たれた未亡人であり、サウジアラビアで苛酷な労働環境にてこき使われていたことを知る。こうして、夫一人に4人の妻と13人の子供のいる世帯に一人で仕えていたイエムは、劣悪な労働条件で働かされた上に、夫にレイプされて墮胎し、最終的には、帰りの航空券と引き換えに賃金は未払いのまま、帰国の途についたという理解が「私」にめばえてくる。

したがって、イエムの異様な様子は、サウジアラビアでの労働が彼女の身も心をもぼろぼろにしたからなのだということが、読者に暗示される。

「見てごらん、あたしの足の親指、つぶれてんのさ」彼女はなおもこう言った。

私は、彼女の気が狂ってはいないことに気づきはじめた。……私は、彼女の足を見つめた。

彼女は長ズボンを少したくし上げ、サンダルを脱いで、足を私の前に突き出し、私に指を見せるための光を探した。やせた指の間で、右の親指は形が崩れ、壊死して腐敗していた。

「雇用者の夕食の食卓の準備をしているときに、机の脚の下敷きになったんだ」

私と視線が合ったときに、彼女はこう言った。

「お医者に行かなかったの？」

「(カネもないのに、どうやって行けと?) あんたのおっ母の金でいけってのかい？」

「ええ、お姉さんの雇用者のお金でいけばいいでしょう」

「それで一日中食事抜きにされるとしても？」

突然私は、彼女に対して同情を感じた。それほどにひどいのか? [Juwita 2008: 64-65]

上の会話からは、「私」が、冒頭のイェムの不気味さは、海外での労働中に虐待を受けたことが理由なのだと感じたことがわかる。冒頭の、雇用者の子供に対する非人道的な発言は、家事労働者として極限まで搾取されたことに対する、イェムの怒りと精一杯の抗議の表現であり、弱い立場の人間が痛めつけられた結果として、さらに弱い立場にある赤ん坊に対して報復するような発言を生んだということが暗示される。こうして当初、イェムの悪意にみちた発言の意味を不気味なものとしてしか理解できなかった「私」は、だんだんとイェムへの評価を180度回転させることによって、「不気味なもの」が、本当は「理解可能なもの」であることに気づく。このような反転によって、「私」の語りは、家事労働者に対して、どれほどの偏見と都合のよい理想が押し付けられているかを浮き彫りにするのである。

3. 家事労働者の「つながりの平等」

二人の行程が進むにつれ、イェムと「私」は、会話を交わしながら少しずつ親しくなる。さらに道程にて、男性たちからの搾取に乗客の女性家事労働者たちが対峙する出来事を通して、二人は関係を深めていく。

移動中、突然、イェムと「私」を乗せた車が予告もなしに停車する。乗客たちは、男たちのグループによって、とある住宅に連れて行かれ、ひとりひとり、鍵のかかった部屋に呼び出され、海外から持ち帰った外貨の両替を強制される。

「我々は TKW を助けている。詐欺が頻発しているため、我々は、TKW の所持金でまだ両替していない小切手や、ドルやリヤル、リングットを両替する手助けをする。なぜなら、そういう外貨は、にせものであることも多いからだ。我々は強制しないが、これは TKW の利益のためにいってるんだ」

魚の干物を盗もうとする猫のように落ち着きのない目つきをした男が言った。[Juwita

2008: 67]

ここで男性によって女性家事労働者を名指す言葉として TKW が使われているのは象徴的であろう。そして、TKW と名指された家事労働者たちは男たちに言われるがまま、所持する外貨を両替するが、「私」とイェムだけは、それぞれ両替を拒否する。イェムは、男たちに対し、無一文であることを理由に両替は無理だと率直に言う。一方「私」は、男たちが故意に悪いレートで両替し、再両替の差益で儲けようとしているのに気づいて、帰国前に手持ちの外貨はすべて両替したと嘘をつく。

また、イェムは、無一文であるのは、雇用者からの給料が未払いであり、帰国後、イェムに該当金額の小切手を送金するという約束だからだと「私」に語りかける。それを聞いた「私」は、おそらく、帰国のための航空券と引き換えに、雇用者の口約束を呑まざるを得なかったのだろうと、イェムの切迫した状況を想像する。ここでも「私」は、当初の不気味さをイェムの語りに耳を傾けることで再解釈しつつ、手探りでイェムなりの理性と主体性に置き換えていく。

その後、彼女らを乗せた車は再び停車する。今回も、乗客の女性たちはひとりずつ呼ばれて、男たちのグループから「安全確保のため」という理由で、追加の車両保険料を要求される。

「わしらは、保険サービスの会社の者だ。あんたが空港で支払った金は、あんたがまだジャカルタと西ジャワを出ないときにだけ有効な保険サービスだ。その後に関しては、わしらは責任を持たない。この前、TKW を乗せた車が、プレバスで強盗にあった。金品はなくなり、TKW はレイプされた。わしらは、ほんの 50 万ルピアだけ要求する。運転手と運転助手の食事も込みだ。いやしかし、これはあんた次第だ。あんた、カネが惜しいか、自分自身が惜しいか」

私の前の男は、良心的な意図を説明しようと懸命だった。[*ibid.*: 68-69]

そしてここでも、「私」とイェムだけが、男たちの詐欺行為の犠牲をまぬがれる。

イェムは、文無しだと言い張って事態を切り抜け、「私」は、咄嗟に機転をきかせて柄の悪い男たちと渡り合う。この経験を経て二人は、一種の連帯感を感じるようになる。

このような描写からは、「私」とイェムが、家事労働者を侮蔑的に TKW と名づけ、金を騙し取るためのカモとみなす男たちをやりこめるだけの知性を持っているということがわかる。送迎車サービスに仕掛けられた詐欺行為は、国際移住女性家事労働者は、無学ゆえに従順で、財布の紐がゆるいという社会通念のせいであると推察されるが、二人はそれぞれのやり方で、搾取の危機を乗り切る。

例えば「私」は、金銭を要求されている最中に、壁にかけられているカレンダーの広告から

今いる場所を推定し、送迎サービスがそれほどまでに危険なら乗車を取りやめ、この街に住んでいる警察官の親戚に迎えに来てもらうと男たちを婉曲に脅して、要求を断ることに成功する。このような機知は、「私」が詐欺師の男たちよりも聡明だということを示しており、既存のバブのフェティッシュに対する強いメッセージとなる。

さらにいえば、このような鋭い筆力でバブにまつわるフェティッシュを暴露し、これまで語られてこなかった家事労働者の強さや知性、理性を描き出した作者のエティッも家事労働者であるという事実は、このテキスト全体の大きな背景として読者の解釈に影響を与えており、家事労働者の能力を見下す考え方に対する強い反証となっている。エティッが描いたバブのパロディとしてのイエムと「私」の描写は、エティッがもつ洞察力と豊かな想像力とともに、バブについてのステレオタイプを暴露しながらそれを転覆する過程をモチーフに物語を構成するという、洗練されたアイロニーの弁証法を駆使する筆力を証明している。このような手法は、家事労働者に対する歴史的な主体性の縛りを断ち切り、国際移住家事労働や親密性労働の複合的差別などの文脈において、人間の強さや理性を解き放とうとする力に満ちている。そしてこのような二人の女性の力は、作品結末のイエムの言葉にて、さらに揚棄される。

二人を乗せた車が、最初にイエムの家に到着したとき、「私」はイエムに最後の質問を投げかける。

「イエムさん！」私は、少し開けたガラス窓を通して呼びかけた。

彼女は、持っていた荷物を振り落とした。足を引きずって、私の方に向かってきた。車のエンジンはすでにかけられていた。

「赤ん坊のミルクの中に入れたネズミ捕りの毒の話、本当？」

「あたしはイエムじゃない、あたしは自由な人間だ！」彼女は言った。彼女は微笑んでいた。[*ibid.*: 70-71]

「私」のイエムとの出会いが幕を閉じようとしたその瞬間、イエムは、自分が名乗っていた名前を拒否し、自分は「自由な人間だ」と主張する。この発話の真意は、前後の文脈が合わないせいで謎に包まれているが、二人はそのまま別れ、その後「私」は、語りの聞き手に向かって、こう解釈する。

その最後の瞬間の微笑みの意味が何なのか、私には、いまだもってまったくわからない。本当のところ、今私があなたにこの話をすると決めたこのときまで。もしかしたら彼女は、自分だって他人を傷つけることができると言いたかったのかもしれない。[*ibid.*: 71]

このような「私」の語りで、ストーリーは幕を閉じる。イェムの最後の発言の真意は慮り難いが、「私はイェムじゃない」と、あとに続く「私は自由な人間だ」を踏まえて、「もしかしたら彼女は、自分だって人を傷つけることができる」といいたかったのかもしれない」と、「私」は想像をめぐらす。こうして、イェムは最後になって再度、「私」にとって不気味な存在となる。その意味でこのテキストは、イェムと「私」の間に安易な紐帯を出現させることを許さない。

ここでの「私はイェムじゃない」という発話では、イェムがバブの従属的ステレオタイプへの同一化を拒否していると考えられる。なぜなら、その後につづく「彼女は、自分だって人を傷つけることができる」といいたかったのかもしれない」という「私」の推察にあるように、イェムは、虐待や差別をただ受け入れるような「犠牲者」として存在するくらいなら、テキスト冒頭の非人道的な発言にあるように、あえて「加害者」として存在することを選んだと解釈できるからだ。

しかしそこで気になるのは、語りの中で、送迎サービスの乗客名簿には、イェムの名前がステイイェムとして登録されていることが言及されている点である。つまりイェムは、(ステイ)イェムであるにもかかわらず、イェムではないと言っているのである。

こうなると、イェムは嘘をついていることになり、これまでのイェムの語りは信憑性を失う。しかし、イェム自身の発話の真偽が留保されたこのとき、わたしたちは、「私」の語りイェムの発話を理解するために不可欠な役割を担っていることに気づくのである。

「私」は、イェムに呼びかけ、イェムが応答する場に同伴し、ともに旅して語り合い、詐欺師たちと闘いながら、語りを行う重要な証人である。つまりイェムは、「自立」した「個人」として存在しているのではなく、「私」との関係性によって初めて、主体的な存在として成立する。そして「私」も、「あんたはまだちっちゃいから」[*ibid.*: 64]、「気をつけて、まだ何もわかつちやいないんだから」[*ibid.*: 70]などの、イェムからの眼差しと気づかいを受けつつ、こうしたイェムと「私」の関係性こそが、「女性の仕事から導かれるような、別のかたちの理性であり、対等な責任や愛情のかたち」[岡野 2012: 211-213] からなる主体性を暗示しているのではないだろうか。

では、女性の仕事から導かれる主体性とは何なのか？ 岡野によると、依存を否定する公的領域が、女性を私的領域における完璧な奉仕者としようとするのとは違い、女性の視点から見た依存関係の論理とは、他人のニーズに応答しながらも、自分の支配下におかず、その人が「そのまま」にあることを願うようなありかたであると言う [同上書：216]。

たとえば、典型的な女性の親密性労働のひとつであると思われる「母親の子どもに対するケア」は、女性にとって「自然」なものであり、母が自動的に子どもに同一化するような、「完全な依存関係」であると思われがちであるが、それは、公的領域によってロマン化された

愛だと岡野はいう。岡野は、ルディクの「母的思考」の概念を援用し、母親が、自分の子どもが自分から生まれ出た一体性ととも、自分とはまた別の存在であるという「不気味さ」を受け入れていること——つまり、子のつきつけるさまざまな予測不可能な要求に翻弄されながらも、子どもを暴力的に支配するのではなく、自らの責任において、できる限り歓迎を込めた応答をすべく、どう接するべきかという答えのない問いを「考える」実践こそが、本来あるべき依存関係の姿であり、そこではまた、依存を引き受ける母親も、自分がケアする子どもと同じように慈しまれ、気づかわれるべきであると主張する [同上書：212-213]。そして、ここでルディクのいう「母的思考」は、キテイが言うように、母子だけではなく、すべての人間に対して開かれた関係性なのである。³²⁾

そう考えれば、語りの中で、「私」とイエムが、互いに注意深く観察し、理解しようと試みつつも、簡単に互いの事情に介入するわけでもなく、それぞれの考えで道中での出来事に対処し、別れの瞬間にさえも、安易な関係性を立ち上げることを拒否する姿は、このような実践にもとづく、支配を伴わない相互関係——「つながりの平等」——が、二人を主体化することを示唆しているのではないか。そしてここでは、「同一化したり、感情的に巻き込まれていく」のではなく、ただ、深い関心を持って課題を共有するという、『女性の仕事』から導かれるような、公的領域とはまた別の形の理性、責任や愛情のあり方 [同上書：214] を、わたしたちに気づかせてくれる。つまり、家事労働者自身も自らが埋め込まれた社会関係の中で気遣われ、尊重されることを必要としているし、またそのような「愛情、気づかい」と「理性」（自立し、自由な個人であろうとする姿勢）は両立させることができるというのが、親密性労働から導き出される相互依存的な主体性の論理なのである。そしてこのような、他者を「注視する愛」 [同上書：215] —— または、他者に対する想像力 ——こそが、自己をも成立させうるのだと気づかせてくれるからこそ、『イエムじゃない』に描かれる家事労働者どうしのつながりの平等は、きわめて重要なのだ。

お わ り に

本稿は、インドネシア人家事労働者への主体化の呼びかけに対して、女性たちがどのように応答しているかについて考察した。バブという名づけは、家事労働者として働く幾多の女性たちを、ジェンダー化された支配関係に紐づく犠牲者、誘惑者、そして、都合の良い性的対象などとして主体化してきた。しかしながら、『イエムじゃない』のイエムと「私」は、互いの眼

32) キテイによると [2010: 122]、依存をめぐる労働とは、家庭や私的な場面で母子や親族、友人等の間にて無償で行われる依存者のケアも含まれており、賃金雇用をとおして行われるだけとは限らない。

差しによって、バブという名づけの文脈をずらし、家事労働者の残酷さや醜さ、怒り、悲しみ、そして知性と理性とを現前させながら、家事労働者どうしが織りなす、他者への気づかいと関わりからなる主体性を立ち上げた。その意味で、イェムの名づけへの拒否は、イェムが自分を「注視」する「私」の眼差しを必要とする一方で、イェムの主体性が「私」からは自立してこそ成立するというを示唆した。この二人が、相手の事情や発話の意図を想像しつつ駆け引きしながら、さまざまな文脈においてお互いに応答する姿勢は、「絆を築きながら、他者の別個性もまた育まれるような共存関係」[岡野 2012: 218] とともに、依存関係において、依存する者とされる者が、ともに安寧に存在できるような状況を願いながら、それぞれのニーズにもとづいて尊重しあうような「つながりの平等」にもとづく主体性が、単に公的でも私的でもない領域にて立ちあらわれることを示している。

そう考えると、イェムたちの語りは、家事労働者の待遇改善という枠を超えて、家事労働を支配してきた「依存関係」の女性化と公的領域における排除という、より大きな背景をなす命題にも問いかける力をもっている。

これまで、「自由な」個人が出会い、「対等に」考えを交換し合う「平等な」場として想像されてきたいわゆる公的領域は、この「依存関係」を私的領域、そして女性主体に象徴的に受け持たせることによって成立していた。このように、特定の人間の排除によって、その他の人間の自由や平等を保障するような考えとは違い、親密圏の視点から見た自由で平等な主体概念は、万人がそれぞれの脆弱性、依存の不可避性などを前提として他者の依存を引き受けながらも、他者を気づかう労働を担う人間の抱えるニーズから目をそらさずに自己を立ち上げようとする。家事労働者であると同時に、二人の人間として描かれたイェムと「私」の語りは、このような人間どうしの依存を前提にした「つながりの平等」を、インドネシア人家事労働者どうしのつながりにとどまらず、家事労働者と雇用者の間、そして家事労働をとりまく全ての人間関係にてとらえうるような、ジェンダーや国籍、職業による分断をも超えうる可能性として提示したのだ。これは、近代家族制度にみられる、複合的にジェンダー化された家事労働とその他の親密性労働の軽視を再考するための軸となるだろう。そしてこのような語りは、近代性において磐石であった「自由」や「平等」「権利」などの主体概念の前提を、親密性労働に携わる者の視点からあらためて問い直す端緒ともなるだろう。

こうして『イェムじゃない』は、家事労働者のステレオタイプ化という歴史的な文脈を利用して、イェム、イネム、イナー、パリエム、そして著者エティツの声と反響しあいながら、家事労働者が他者から気遣われる欲求を持つ人間であることを示しつつ、人間どうしが互いに依存しながらも支配しないようなあり方を描き出した。そしてこの語りは、このような主体性が単独ではなく、ひととひととの「気づかいのつながり」によって、きわめてパフォーマティブに立ちあらわれるということもまた明らかにした。これは、冒頭で触れたエルウィアナ事件に

て、支援者たちが傷ついたエルウィアナを気づかい、助けようとする中で、「虐待の犠牲者」としてではなく、「虐待からのサバイバー」としての外国人女性家事労働者の主体性を生み出したのと同様に、強いメッセージ性をもつ社会的発話である。

エルウィアナは、かつて香港国際空港のベンチにひとり座っていた時点では、自らが受けた虐待を訴える言葉を失っていた。³³⁾ このように発話が起りようのない状況でエルウィアナの痛みが理解されるためには、彼女の受けた痛みに基づいて思いを馳せる人々が必要であった。そして「イェムじゃない」という発話においてイェムは、バブとして呼びかけられることを拒否するとともに、このような発話からは予測不可能な主体性を読み取ってほしいと「私」に訴えかけた。このような沈黙と名づけへの拒否——つまり、エルウィアナの剥き出しの生とイェムの発話のあいだにおいてこそ、「つながりの平等」による家事労働者の主体性をわたしたちは見出すことができるのだ。この意味においてエルウィアナ事件は、本稿が『イェムじゃない』にみたような、発話から人間の主体性を見出す考え方の限界を乗り越える手段としても「つながりの平等」が有効だということを示唆するといえるだろう。

もしそうならば、現在起こっている親密性労働の国際移動の高まりは、近代的主体論の前提となってきた公的領域と私的領域の二項対立性や人間の自律性の再考という命題を、親密圏として人間どうしの依存を中心に据えた主体性認識へと接合する契機を生み出している。そして『イェムじゃない』は、女性家事労働者がこのような機運に敏感に応答し、インドネシアと香港にて自らが生きる文脈のなかで、他者を気づかう労働をしながら自分自身であることは可能かと問いかけた、たぐいまれな発話である。

引用文献

日本語引用文献

- アムネスティ・インターナショナル. 2014a. 「中国——香港政府は家事労働者の搾取に終止符を打て」 2014年12月10日アクセス. http://www.amnesty.or.jp/news/2014/0508_4577.html.
- . 2014b. 「毎日が暴力——インドネシア人の女性に救いの手を！」 2014年12月10日アクセス. http://www.amnesty.or.jp/get-involved/action/hk_201401.html.
- バトラー, J. 2004. 『触発する言葉』 竹村和子 (訳). 東京: 岩波書店. (原著 Butler, Judith. 1997. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. New York: Routledge.)
- チルダース, J.; ヘンツイ, G. (編) 1998. 『コロンビア大学 現代文学・文化批評用語辞典』 杉野健太郎; 中村裕英; 丸山 修 (訳). 東京: 松柏社. (原著 Childers, Joseph; and Hentzi, Gary, eds. 1995. *The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism*. New York: Columbia University Press.)

33) 帰国当初のエルウィアナは治療に専念するしかない状態であったが、健康がある程度回復してからは、香港で働くインドネシア人家事労働者自助組織からのサポートを得て自分の経験の意味について理解を深め、外国人家事労働者への虐待に反対する発言を行っている。たとえばCNNの番組 [Whiteman and Kam 2015] を参照。

- 江原由美子. 2014. 「フェミニズムと家族」『社会学評論』64(4): 553-572.
- フレイザー, N. ; ホネット, A. 2012. 『再配分か承認か? 政治・哲学論争』加藤泰史 (監訳). 東京: 法政大学出版局. (原著 Fraser, Nancy; and Honneth, Axel. 2003. *Umverteilung Oder Anerkennung?* Frankfurt: Suhrkamp.)
- フロイト, S. 2006. 『不気味なもの』須藤訓任; 藤野寛 (訳). 東京: 岩波書店. (原著 Freud, Sigmund. 1920. *Das Unheimliche*. Publisher Unknown.)
- 稲葉奈々子. 2008. 「女性移住者と移住システム —— 移住の商品化と人身売買」『国際移動と「連鎖するジェンダー」』伊藤るり; 足立真理子 (編), 47-67 ページ所収. 東京: 作品社.
- 伊藤るり. 2008. 「再生産労働の国際移転とジェンダー秩序の再編」『国際移動と「連鎖するジェンダー」』伊藤るり; 足立真理子 (編), 21-46 ページ所収. 東京: 作品社.
- . 2009. 「再生産労働の国際移転における越境的世帯保持, 国家, 女性移住者 —— 入れ子型ヒエラルキーの弛緩とグローバル・サーキットとの関連で」『アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー再配置』国際移動とジェンダー研究会 (編), 3-15 ページ所収. 東京: 国際移動とジェンダー研究会.
- 伊藤るり; 足立真理子 (編). 2008. 『国際移動と「連鎖するジェンダー」—— 再生産領域のグローバル化』東京: 作品社.
- 木田 元; 栗原 彬; 野家啓一; 丸山圭三郎 (編). 1997. 『コンサイス 20 世紀思想事典 第 2 版』東京: 三省堂.
- キテイ, E. F. 2010. 『愛の労働 —— あるいは依存とケアの正義論』岡野八代; 牟田和恵 (監訳). 東京: 白澤社. (原著 Kittay, Eva Feder. 1999. *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*. New York: Routledge.)
- キテイ, E. F. ; 岡野八代; 牟田和恵. 2011. 『ケアの倫理からはじめる正義論 —— 支えあう平等』東京: 白澤社.
- 松尾 大. 1997. 『バタビアの都市空間と文学』大阪外国語大学学術研究双書. 大阪: 大阪外国語大学学術出版委員会.
- 落合恵美子 (編). 2013. 『親密権と公共圏の再編成 —— アジア近代からの問い』京都: 京都大学学術出版会.
- 落合恵美子; 赤枝香奈子 (編). 2012. 『アジア女性と親密性の労働』京都: 京都大学学術出版会.
- 小ヶ谷千穂. 2008. 「移住家事労働者におけるヴァルネラビリティの構造と組織化の可能性」『国際移動と「連鎖するジェンダー」』伊藤るり; 足立真理子 (編), 93-113 ページ所収. 東京: 作品社.
- 岡田温司. 2005. 『マダダラのマリア —— エロスとアガペーの聖女』東京: 中公新書.
- 岡野八代. 2012. 『フェミニズムの政治学』東京: みすず書房.
- ストローラー, A. L. 2007. 『プランテーションの社会史』中島成久 (訳). 東京: 法政大学出版局. (原著 Stoler, Ann L. 1985. *Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantation Belt, 1870-1979*. Ann Arbor: University of Michigan Press.)
- . 2010. 『肉体の知識と帝国の権力』永渕康之; 水谷智; 吉田信 (訳). 東京: 以文社. (原著 Stoler, Ann L. 2002. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley: University of California Press.)
- 上野加代子. 2011. 『国境を越えるアジアの家事労働者 —— 女性たちの生活戦略』京都: 世界思想社.

外国語引用文献

- Andersen, Brigit. 2000. *Doing the Dirty Work*. London: Zed Books.
- Anugerah Sastra Pena Kencana. 2008. *20 Cerpen Terbaik Indonesia 2008*. Jakarta: Penerbit PT Gramedia Pustaka Utama.
- Budianta, Melani. 2005. Pembantu Rumah Tangga dalam Sastra: Konstruksi Budaya Kelas Menengah. *Srinthil: Media Perempuan Multikultural* 8: 67-92.
- Chang, Kimberly A.; and Ling, L. H. M. 2011. Globalization and Its Intimate Other: Filipina Domestic Workers in Hong Kong. In *Gender and Global Restructuring: Sightings, Sites and Resistances*, edited by Marianne H. Marchand and Anne Sisson Runyan, pp. 30-48. London and New York: Routledge.
- Cheah, Pheng. 2003. *Spectral Nationality: Passages of Freedom from Kant to Postcolonial Literatures of*

- Liberation*. New York: Columbia University Press.
- Constable, Nicole. 1997. *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Migrant Workers*. New York: Cornell University Press.
- . 2007. *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Migrant Workers*. Second Edition. New York: Cornell University Press.
- . 2009. Migrant Workers and Many States of Protest in Hong Kong. *Critical Asian Studies* 40(4): 143-164.
- Day, Tony. 2001. Between Eating and Shitting: Figures of Intimacy, Storytelling and Isolation in Some Early Tales of Pramoedya Ananta Toer. In *Clearing a Space: Postcolonial Readings of Modern Indonesian Literature*, edited by Keith Foulcher and Tony Day, pp. 213-236. Leiden: KITLV Press.
- Foulcher, Keith; and Day, Tony, eds. 2002. *Clearing a Space: Postcolonial Readings of Modern Indonesian Literature*. Leiden: KITLV Press.
- Garcia, Michael N. 2004. Indonesian Free Press. *Indonesia* 78: 121-146.
- Hall, John. 1979. *The Sociology of Literature*. London: Longman.
- Hatley, Barbara. 1999. New Directions in Indonesian Women's Writing? The Novel Saman. *Asian Studies Review* 23(4): 449-460.
- Heryanto, Ariel. 2014. *Identity and Pleasure: The Politics of Indonesian Screen Culture*. Singapore: NUS Press; Kyoto: Kyoto University Press.
- Hondagneu-Sotelo, Pierrete. 2007. *Doméstica: Immigrant Workers Cleaning and Caring in the Shadows of Affluence*. Berkeley: University of California Press.
- Hong Kong, Legislative Council of the Hong Kong Special Administrative Region, the People's Republic of China. 2014. *Legislative Council Panel on Manpower: Policies Relating to Foreign Domestic Helpers and Regulation of Employment Agencies LC Paper; No. CB(2)870/13-14(01)*.
- Hong Kong, The Labour Department. 2014. *Practical Guide for Employment of Foreign Domestic Helpers*. (bahasa Indonesia) Accessed on December 10, 2014. <http://www.labour.gov.hk/eng/public/wcp/FDHguideIndonesian.pdf>.
- Hsia, Hsiao-Chuan. 2009. The Making of Transnational Grassroots Migrant Movement: A Case Study of Hong Kong's Asian Migrants' Coordinating Body. *Critical Asian Studies* 41(1): 113-141.
- Huang, Shirlena; Yeoh, Brenda, S. A.; and Rahman, Noor A. 2005. *Asian Women as Transnational Domestic Workers*. Singapore: Marshall Cavendish Academic.
- Ignacio, Emilyzen; and Mejia, Yesenia. 2009. *Managing Labour Migration: The Case of the Filipino and Indonesian Domestic Helper Market in Hong Kong*. ILO Asian Regional Programme on Governance of Labour Migration Working Paper No. 23.
- Justice for Erwiana Action Centre. n. d. *Justice 公道 for Erwiana*. Accessed on December 10, 2014. <http://hkhelphercampaign.com/en/justice-for-erwiana/>.
- Juwita, Etik. 2008. Bukan Yem. In *20 Cerpen Terpilih dari Anugerah Pena Kencana*, pp. 61-72. Jakarta: Penerbit PT Gramedia Pustaka Utama.
- Kementerian Hukum dan Hak Asasi Manusia. 2014. *Komnas Perempuan Desak RUU Perlindungan PRT Disahkan*. Accessed on September 7, 2014. <http://www.indonesia.go.id/in/kementerian/kementerian/kementerian-hukum-dan-hak-asasi-manusia/717-ham/13884-komnas-perempuan-desak-ruu-perlindungan-prt-disahkan>.
- Komunitas Salihara. 2014. Ayu Utami. Accessed on September 7, 2014. <http://salihara.org/about/curators/ayu-utami>.
- Lai, Ming-Yan. 2010. Dancing to Different Tunes: Performance and Activism among Migrant Domestic Workers in Hong Kong. *Women's Studies International Forum* 33(5): 501-511.
- Lan, Pei-Chia. 2006. *Global Cinderellas: Migrant Domesticities and Newly Rich Employers in Taiwan*. Durham: Duke University Press.
- Lau, Chris; and Chan, Thomas. 2015. Erwiana's Former Boss Jailed for Six Years as Judge Calls Her Behaviour 'Contemptible'. *South China Morning Post*. February 27, 2015. Accessed on April 13, 2015. <http://www.scmp.com/news/hong-kong/article/1724621/hong-kong-employer-who-abused-indonesi>

- an-maid-erwiana-jailed-six.
- Locher-Scholten, Elizerbeth. 2000. *Women and the Colonial State: Essays on Gender and Modernity in the Netherlands Indies 1900-1942*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Mam, Somaly. 2014. The 100 Most Influential People: Erwiana Sulistyaningsih. *Time.com*. Accessed on December 10, 2014. <http://time.com/70820/erwiana-sulistyaningsih-2014-time-100/>.
- 蘋果日報. 2014. 「【印傭受虐】Erwiana 情況好轉 開始進食」2014年9月10日アクセス. <http://hk.apple.nextmedia.com/realtime/breaking/20140114/52091278>.
- Parreñas, Rhacel S. 2000. Migrant Filipina Domestic Workers and the International Division of Reproduction. *Gender & Society* 14(4): 560-580.
- Rie Rie. 2014. Babu Ngeblog. Accessed on December 10, 2014. <http://babungeblog.blogspot.jp/>.
- Robson, Stuart; and Wibisono, Singgih. 2002. *Javanese English Dictionary*. Jakarta: Periplus.
- Romero, Mary. 2002. *Maid in the USA*. London and New York: Routledge.
- Salim, Hairus. 2013. Dari Babu ke Pekerja Rumah Tangga. *Rublik Bahasa*. Accessed on August 5, 2015. <https://rubrikbahasa.wordpress.com/2013/03/17/dari-babu-ke-pekerja-rumah-tangga/>.
- Santoso, Waris. 2014. Demonstrasi BMI Hong Kong. *Kompasiana*. Accessed on December 10, 2014. <http://luar-negeri.kompasiana.com/2014/01/19/demonstrasi-bmi-hong-kong-628976.html>.
- Sawai, Shiho. 2009. Ambivalent Marginality: Literary Activities of Indonesian Muslim Female Domestic Workers in Hong Kong. In *the Proceedings of CAAS International Inauguration Conference*, pp. 11-22. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.
- Schaerrer, Sean D. 2012. Challenging the Norms: Re-evaluating Situations Faced by Foreign Domestic Helpers in Asia. *Creighton International and Comparative Law Journal* 2: 187-201.
- Setia, Putu. 2011. Babu. *Tempo*. June 26, 2011. Accessed on August 5, 2015. <http://www.tempo.co/read/carianginKT/2011/06/26/260/Babu>.
- Shadbolt, Peter. 2014. Indonesian Migrant Worker Tells of Abuse as Thousands Protest in Hong Kong. *CNN International Edition*. Accessed on December 10, 2014. <http://edition.cnn.com/2014/01/20/world/asia/hong-kong-maid-indonesia/index.html>.
- Siegel, James T. 1996. Commentary: Flunky+Maid. *Indonesia* 61: 43-50.
- . 1997. *Fetish, Recognition, Revolution*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Sim, Amy. 2007. Women in Transition. Unpublished PhD Thesis submitted to Hong Kong University.
- . 2010. Transnational Sexuality among Women Migrant Workers: Indonesians in Hong Kong. In *As Normal as Possible: Negotiating Sexuality and Gender in Mainland China and Hong Kong*, edited by Ching Yau, pp. 37-50. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Sofi'i, Mohammad. 2014. Nilai Remitansi TKI Jepang Lebaran Mencapai Rp. 500 Juta per Hari. *Bisnis Indonesia.com*. Accessed on December 10, 2014. <http://surabaya.bisnis.com/read/20140721/4/73226/nilai-remitansi-tki-jelang-lebaran-capai-rp500-juta-per-hari>.
- Soyomukti, Nurani. 2007. Perempuan dalam Sastra. *Seputar Indonesia*, December 23, 2007. Accessed on March 3, 2012. <http://media-sastra-indonesia.blogspot.jp/2011/06/perempuan-dalam-sastra.html>.
- Sugihastuti. 1998. Penelitian Kualitatif Sastra Berperspektif Feminis. *Humaniora* 8: 28-32.
- Suryadi, Linus, Ag. 1980-2002. *Pengakuan Pariyem*. Yogyakarta: Pustaka Pelajar.
- Suryomenggolo, Jafar. 2012. Factory Employment, Female Workers' Activism, and Authoritarianism in Indonesia: Reading Ida Irianti's *Pembelaan*. *Critical Asian Studies* 44(4): 597-626.
- Toer, Pramoedya Ananta [1952] 1989. Inem. In *Cerita dari Blora*, pp. 30-40. Kuara Lumpur: Wira Karya.
- . [1957] 1996. Flunky+Maid, Translated by James T. Siegel. *Indonesia* 61: 33-42.
- . 1957. Djongos+Babu. In *Tjerita dari Djakarta*, pp. 5-18. Djakarta: Penerbit Grafika.
- Utami, Seneng. 2015. Mau kaya, jadilah TKW! *Kompasiana*. Accessed on July 4, 2015. http://www.kompasiana.com/senengutami/mau-kaya-jadilah-tkw_552ff0ce6ea834806d8b4617.
- Watson, Rubie S. 1991. Seven Wives, Concubines, and Maids Servitude and Kinship in the Hong Kong Region in 1900-1940. In *Marriage and Inequality in Chinese Society*, edited by Rubie S. Watson and Patricia Buckley Ebrey, pp. 231-255. Oakland: University of California Press.
- Wee, Vivienne; and Sim, Amy. 2001. Hong Kong as a Destination for Migrant Domestic Workers. In *Asian*

- Women as Transnational Domestic Workers*, edited by Shirlena Huang, Brenda S. A. Yeoh, and Noor Abdul Rahman, pp. 155–189. Singapore: Marshall Cavendish Academic.
- Weix, G. G. 2000. Inside the Home and outside the Family: The Domestic Estrangement of Javanese Servants. In *Home and Hegemony: Domestic Service and Identity in South and Southeast Asia*, edited by Kathleen M. Adams and Sara Dickey, pp. 137–156. Michigan: The University of Michigan Press.
- Whiteman, Hilary; and Kam, Vivian. 2015. Hong Kong Court Finds Housewife Guilty of Abusing Young Maid. *CNN*. February 19, 2015. Accessed on August, 2015. <http://edition.cnn.com/2015/02/09/asia/hong-kong-domestic-worker-erwiana/>.
- Wismabrata, M. 2014. Erwiana, TKW asal Sragen disiksa majikan di Hong Kong. *Kompas*. January 20, 2015. Accessed on December 10, 2014. <http://regional.kompas.com/read/2014/01/20/1249353/Erwiana.TKW.Asal.Sragen.Disiksa.Majikan.di.Hongkong>.
- Yayasan Jurnal Perempuan. 2007. Menyoal Buruh: Mengapa Mereka Dieksplotasi? *Jurnal Perempuan* 56.

(2015 年 10 月 28 日 掲載決定)